

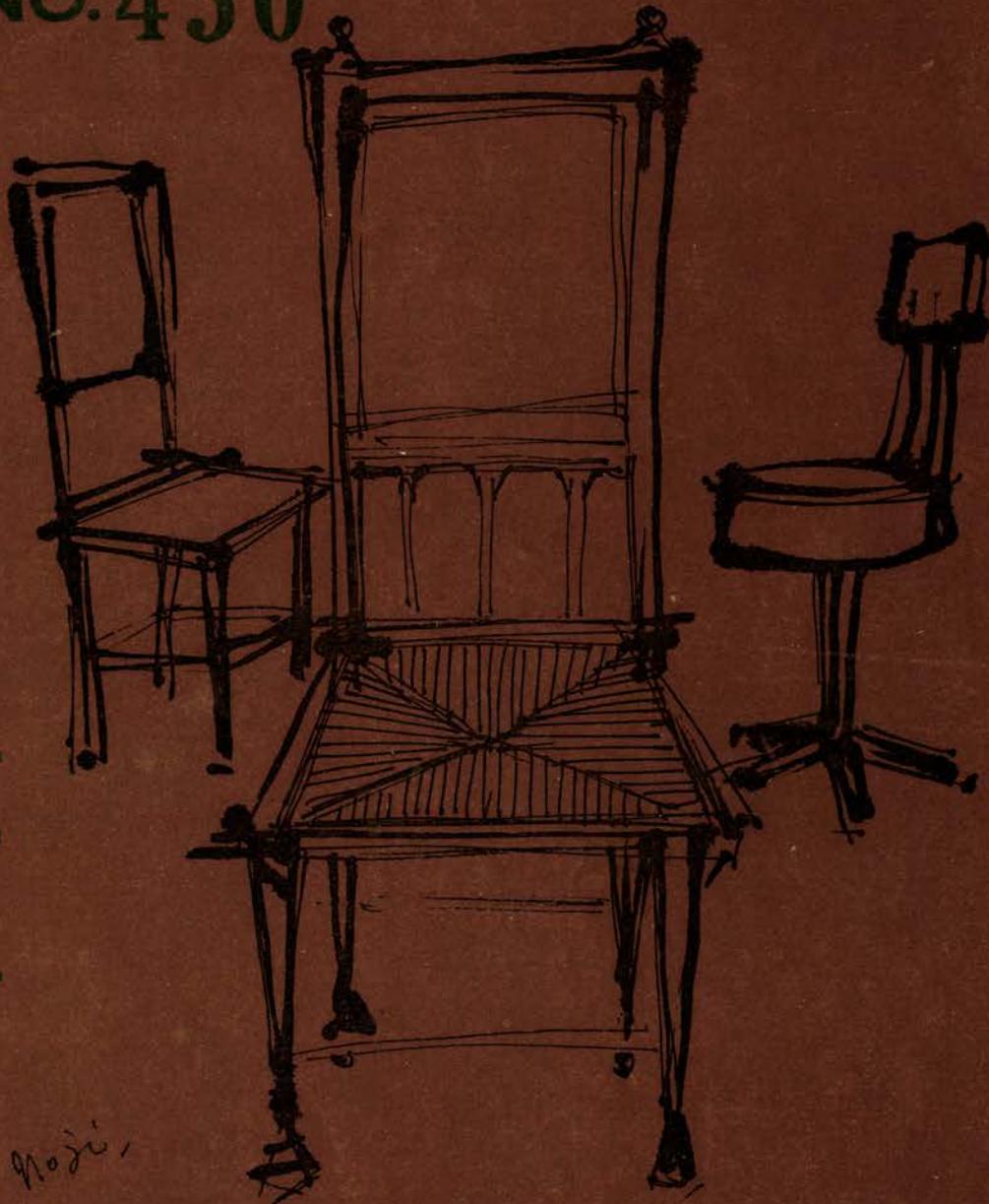
# 川柳の雑記

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

## No.450

麻生路郎☆主宰



十一月号

Moji,

川柳雑誌社主催

# 文化の夕

12月本社句会予告

兼題  
一流  
時間潰し  
夜風  
媚

文化の秋——落付いた会場で名句佳吟にひたりましょう。

この機会に初心の方もおこし下さい。

日時 十一月六日(金) 午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪府南区千日前電停スグ北側

兼題「白 菊」(二句) 若本多久志選

「真 珠」(三句) 正本水客選

「へんくつ」(三句) 金井文秋選

「けたもの」(三句) 橘高薫風子選

席題 三題(当日発表)

麻生路郎

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 いさむ・文秋・庸佑・八郎・与呂志・清人

・す・む・薫風子・柳宏子・舟遊・摩天郎

★投句だけの方は郵券三十円同封

(〆切十一月五日)

大阪府住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六七二局 六〇八一



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (花魁ケース入) 一、八リットル詰・一、二〇〇円

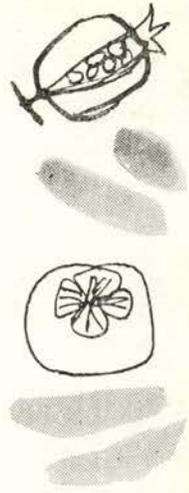
清酒

# 日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀





# 不朽洞句帖

麻生路郎

男の友情 老いには触れず  
票本にて

橋にたたずめば靈眼山房暮れ残る  
草にて

旅に病んで時計二つとも止まり

見送りの振る手うれしく雲に入る  
大村空庵にて

危惧もなくわれおおらかに雲をゆく

雲よ雲よ 我れとともにあり果てしなく

雲の中をゆく 永遠を思はない

やがて着陸か 大阪は思いの外に近し

一〇、九一三 日記に代えて

## 川柳雑誌★十一月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎…(3)

川名句抄の鑑賞……………麻生路郎…(4)

私の句会論……………東野大八…(19)

現代柳人録……………丸十府・岡田甫…(22)

川傍柳初編研究(10)……………川端柳風・高須啞三味・前田喜代人…(12)

岡崎重義・清博美・藤井和雄……………(12)

恒雄逝く……………今野空白…(39)

現代川柳の中の伝統性……………(16)

集妻を語る……………川村好郎・山路閑古…(26)

西川晃・後藤梅志……………(26)

直原七面山・野村味平……………(26)

五世川柳とその句(三)……………阿達義雄…(29)

追悼の窓をかすめるちぎれ雲……………野村味平…(20)

嵐雪・沾徳・鬼貫……………富士野鞍馬…(34)

大万川柳「頭」発表……………(35)

不朽洞の人々……………白浜子氏の巻…(41)

川柳近詠……………麻生路郎選…(6)

同舟近詠……………諸家選…(28)

近作柳檣……………麻生路郎選…(20)

人生譜……………北川春巢選…(32)

金泥集……………河野春三選…(37)

各地柳壇……………麻生路郎選…(32)

★柳界展望……………(40)

入門講座……………不朽洞会から…(39)

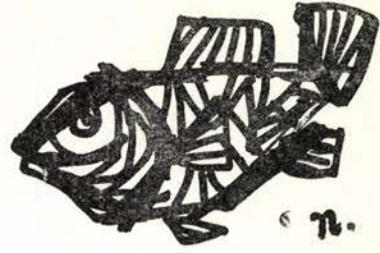
一路集……………清水平柳…(36)

「さほる」……………市場没食子選…(38)

「空」……………水松東岸選…(38)

「楽屋」……………森下愛論選…(46)

★柳梅室……………路郎生…(46)



川柳

# 名句抄の鑑賞

麻生路郎

## 秋の夜の幸福お側で針仕事

(素身郎)

秋の夜長に、愛する夫のお側で、静かに針仕事をしているのを幸福だと感じている幸福こそ、女にとってホントの幸福かも知れない。

「ねえ、あなた。ねえ、あなた」を連発したことであろう。しかし、こんな幸福は明治型で陳いわと一蹴するかも知れないが、幸福はその人の主観によって決定づけられるものであるとするならば、それでいいのではないか。

〔一一二〕

テクテクペコペコテクテクペコペ

コ靴ちびる

(甲吉)

萩原朔太郎の詩に「軍隊」がある。通行する軍隊の印象を詠ったものだが、づし

り、づしり、ばたり、ばたり、ざっく、ざ

っく、ざっく。と擬音を巧みに駆使して行進のありさまを物凄くまでに表現していた

が、ここにかかった「テクテクペコペコ」の句も擬音による同巧異曲のものとして面白く思った。下五の「靴ちびる」だけで、サラリーマンの生活描写であることをうながせる表現技巧の巧みさは後進の学びとていい叙法だと云えよう。

〔一一三〕

女の脚のすばらしい海

(旭童)

この句は七・七の短句だが、海水を透して女の脚を眺美した句として秀れている。

表現がテキパキしているのもいい。これは十四字詩としての特徴を余すところなく表わした句だ。余分の文字が一字もないのもいい。女の脚と海と云っただけで十二分に

実感が出ていると思う。

〔一一四〕

刀自今日も読経の中に半眠す

(どんたく)

刀自というのは、老婦人の尊称だが、刀自と呼ばれる多くの老婦人は未亡人が多い。この句に詠まれた刀自もその一人だろう。亡き夫への読経であろう。しかし、もう年が経つと読経もマンネリズムになって、ただウツラ、ウツラとしてしまうものだ。刀自生活の一面を巧みに描写している。「半眠す」が句を生かしている。

〔一一五〕

引越しの荷物となって手を引かれ

(香林)

これは作者の実感句だ。晩年に失明した彼が、住みなれた大阪から、失意の果て郷里岡山へ去る直前に引越したことがあったが、この句はその頃の作品である。一徹な彼が「荷物となって手を引かれ」と詠んだ寂びしい心境は悲癡の極だと云えるだろう。この句の延長が遂に彼を死地へ送ったのである。涙なしには読めない句だ。

積み重ねて待機してまず棺桶屋

〔一一六〕

棺桶屋も立派な商売には違いないが、この句を一読したあと味は普通の商売屋が商

品を積み重ねて待機しているのと同じではない。棺桶を沢山製造して、死人を待っていると云うところに非情なものを感ずるからである。「待機してまず」という言葉が、多少ともこの句をユーモラスにしている。

〔一一七〕

オールドミスはまだしおれず造

花に似 (七面山)

オールドミスの美しさ、しかし何んとなく生気を失った美しさ、それが造花に似た美しさだと感じたのである。作者の神経の繊細さが読みとれる句だ。一つの発見である。

〔一一八〕

見本には流石の蠅も寄りつかず

(圭井堂)

一読して、その通り、その通りという句だが、擬人法にしたところに、風刺の匂いが多分にあって、面白い句だと思ふ。人間も人間の見本のような人間にはなりたくないものだ。

年寄りには座れるものと思うバス

〔一一九〕

この句のような、甘い考えをもっている老人が、かなり多いことに気づいたのであ

ろう。こういう年寄りは、一〇〇パーセント老婦人の方である。席もないのに、人の膝の上によるめいて

(魅光)

来るが婆さんは、その席の人が必ず立って  
くれるものと予想しているからである。筆  
者は斯うした年寄りの心の底にひそむもの  
を面ら憎く思う。

〔一一〇〕

ポンと捺しても歪んでおらぬ盲判

(求女)

課長や部長は他の面会者と対談しながら  
も、下俵から差し出す書類へ、ポンポンポ  
ンポンと盲判を押してゆく。それでいて、  
盲判が少しも歪んでおらないというのであ  
る。盲判の一面を見た句には違いない。し  
かし、これは習練にもよろうが性格にもよ  
るのであろうと思われる。どんな仕事でも  
水年やっていると機械的にもなるが、そう  
した中でも間違や考慮を要するものは発見  
し得られるものである。盲判必ずしも盲判  
でないとも云える。

〔一一一〕

再婚もまんざらでない男親

(三司)

「もう一悶忌も済んだし、お子たちも小さ  
いんだし、何かと、ご不自由でしょう」  
と、再婚をすすめられて見ると、  
「それもそうだなア」と男親というものは  
再婚について、とかく心のうごきやすいも  
のだ。そうした心境を「まんざらでない」  
という中七の措字で巧みに表現している。

〔一一二〕

脱ぐ役を蹴ればスターの座から落  
ち (紫光)

近ごろの映画のスターには脱ぐ役が多い  
のをつかんだ句だ。脱ぐ役とは云うまでも  
なく裸になる役だが、最近、映画がテレビ  
に観客を奪われるので、どうしたら観客を  
映画に繋ぎとめることが出来るかに腐心し  
た結果、観客の欲情に訴えた映画製作に走  
ったことを物語るものである。裸になるこ  
とを拒否すればスターの座から落ちねばな  
らないとは何んという情ない話だ。もっと  
も裸になることと芸術とは別である。

〔一一三〕

男みな紙幣に見えるまでにおち

(愛鳩)

からだを張る女にとって、男という男  
が、みなおさつに見える。「彼らの要求す  
るものはワタシのからだ以外にはないんだ  
ものと女は割り切っている。それほどまで  
に彼の女は堕ちたというのである。この句  
の場合、「紙幣に」は「お紙幣(おさつ)  
に」と、軟らかく詠ませる方がいいと思う。

〔一一四〕

自家用にひろわれ散歩辞せず

(千容)

自分の前で、自家用車がビタリと停止し  
た。  
「どうです。××さん、お乗りになつて  
は？」

運転しているのは同じ町に住むA社の専  
務である。  
「有難う。でも、あなたお急ぎなんでしょ  
う。」  
「別にいそいでもないません。どこへお出か  
けでした？」  
「一寸散歩に出かけたんですが、今帰ると  
こなんです。」  
「では、お乗りくださいってはいかが、私も  
これから帰るとこなんです。」  
「では、お帰っていただきましょうか。」  
と、いうところか。

〔一一五〕

おやつあげて帰ってもろうハシカ  
の子 (可住)

きのうまでハシカで寝ていた隣りの子が  
遊びにやって来た。仲よしのおとなしい子  
だが、もしウチの子にハシ  
カが伝染してはという危  
惧から、母としての注意深  
さが、おやつをあげて、帰  
ってもらったのである。作  
者のこまかい神経から詠ま  
れた家庭川柳として採っ  
た。

〔一一六〕

下積の吊皮で読む朝  
刊紙 (宵明)

通勤の車中でよく見かけ

る図で、何んの奇もない句だが、下積のサ  
ラリーマン生活を詠んだ句として面白く思  
った。通勤にこの句の場合、朝刊紙を持って  
来たのは自然であって、週刊紙でも、小説  
でもビタリと来ない。そんなところにも素  
材の選択はおろそかであってはならないと  
思う。

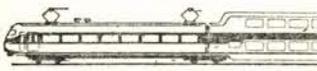
〔一一七〕

カロリーにこだわり過ぎた味にな  
り (実男)

(実男)

近ごろの料理が、一にもカロリー二にも  
カロリーというのを風刺した句として面白  
い。カロリーにこだわり過ぎた結果、変な  
味になったと一寸支肉だったのである。必ず  
しも味を問題にしている訳ではなからう  
が、斯うした誇張によって皮肉るほど、カ  
ロリー、カロリーと云うのが作者には耳障  
りに感じたのであろう。筆者なども、お蔬  
菜に、AがどうだのBがどうだのと老妻に  
云われると、味が半減する思いがする方だ  
から、この句をとりあげた。

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ  
**近鉄 2階 特急**  
大阪一名古屋 ノンストップ  
2時間13分  
大阪上本町発……毎時0分  
名古屋発……毎時30分  
▶伊勢・名古屋ゆき  
大阪上本町発……毎時15分  
▶伊勢・大阪ゆき  
名古屋発……毎時45分



特急券のお求めは  
21ヶ月前から  
本通社各案内所  
近畿日本  
鉄道株式  
会社

近鉄



# 川柳塔

## 麻生路郎選

西宮市 若本多久志

ひとりじめにした倅のなかで死に

芥川賞の「されど我が日々」を読んで

兵庫県 小西無鬼

インテリはセックスにまで理論づけ

水やれば吸い込む花の鉢うれし

憲法は同権税はおやしだけ

片言の支那語事変の勇士とか

憂<sup>うた</sup>てやなあ、地労委の被告席

階段を気分て昇るのもおかし

大阪府 川村好郎

大阪府 西いわを

秤のような女心のみだらなる

人前で泣いても女麗しく

金だけで解けぬなやみを聞く夜長

新墓地整然として朝日を仰ぐ

有馬温泉

療養生活

湯の色は変れどなつかし有馬筆

看護婦へ甘える癖を持つづるさ

高槻市 若柳潮花

大阪市 北川春葉

泰子におくる

夏やせを指輪スポスポさせて見せ

恋の手をひく花道のみじかすぎ

晩酌の父へばっかり蚊がたかり

ほたる草踏みにじられたまゝで咲き

陳情へ日光見たいのもまじり

アルバムへするくちづけの冷たかり

食うために生きるなとこそ云われしが

哀愁の底で燃えてる曼珠沙華

老らくの恋まむし屋へ上りこみ

蛇の目傘新地の宵をはすに出る

大阪市 後藤梅志

人吉で生れたを母なつかしみ

老鷲は考えるふりして啼かず

内職をしにくる人もある温泉バ

赤い羽根くすぐったくも胸を出す

ハワイ 羽佐間柳葉

国宝は事件があつてぱつと知れ

信念に生きれば義理に突き当り

お金さへあれば世界は隣なり

ツイストに布哇ワイキキフラダンス

堺市 吉田圭井堂

血液を預けて来いと二十貫

ビタミンに頼みまっせと夏ばてを

釣具部は二階へやられ地下に落ち

見本には流石の蠅も寄りつかず

インタービュ百十歳をなぶりに来

防府市 長野井蛙

パトカーが来て駐在所強くなり

ライバルに勝ち得た女が尻にしき

底辺の愚痴安宿で雑魚寝をし

黙否権弱者も法に立て籠り

岡山県 直原七面山



温泉に来てまで日歩の計算し

陽子氏の新築記念祝賀句会にて

それぞれに植木の寄進を約束し

天命も待たずに派手な腹上死

グラス片手にBG男の値踏みをし

机上論だよと下っ端ついて来ず

オールドミスのいまだしをれず造花に似

鳥取市 河村 日満

敬生寮完成

祝宴になって老人ひきあげる

説得にイカス言葉を思い出し

倉敷市 木村 千容

いぶし銀みたよに味の出る男

人間をぎりぎりにせり簾枯らし

二代目もやはりがりがり亡者らし

いたわりは有難いけど淋しいね

倉敷市 田垣 方大

各停へ損をしたよな気で乗車

オフリミットよけいにはいつてみたくなり

急患の電話えすり餌ほっとかれ

加賀市 野村 味平

神経の太さでママはパパを好き

絹こしも木綿も切れた暑さなり

一生を薄情で通し少し蓄め

薄情な人やっつけれど子に甘く

大阪市 木村 水洞

暴力と利害が一致して当選し

衣食住足りても礼節忘れられ

孝行の意味も知らない子に育ち

仁と義を守る心に悔はなく

高槻市 福田 丁路

父であり母であり恋の逃避行

保釈金積んで大手振って出る

自首をすゝめて泣く親心

勲章をけなしビールの味を褒め

米子市 小西 雄々

育児メモ欲しがる乳へ泣かしとき

金持へ金が集まるように寄り

女には損を承知のセールスマン

大阪市 山川 阿茶

無風流滝へもゆかず牌を持ち

加賀市 那谷 光郎

会議好き宴会好きと覚えたり

まだ嫁れぬゴキブリにさえ悲鳴

大阪市 福井野 迷路

髪も髭も茫々諦め切った顔

血を売らな食えぬ政治へ人造り

出来ぬ子にまだ残ってる自衛隊

下関市 桜川 不水

貧乏に生れ貧乏に落ち付いた

昔ならもう徴兵のA少年

飯糊の浴衣は母の匂いする

岡山県 浜田 久米雄

退職金ちびりちびりと借りに来る

白いひげ生えたを淋しそうに刺り

とり入れの秋作業着を買うて待ち

農道のある日は花にさゝやかれ

大阪市 清水 白柳

ロケーションだけに並木が役に立ち

腹の子を予約しに来た兄夫婦

ほろ酔とうまを合わせて乗りおくれ

出雲市 尼緑 之助

水害地河原に米が生き残り



八十の童顔将棋に相對し

秋風よテレビに見入る精神科

広島市 弘津 柳慶

見送りにお女将が来たので派手になり

どぶ川が匂う都会の動きよう

一泊旅行女子職員のハシヤイで

子のいない夫婦ゆかたで出掛たり

京都市 大鶴 喜由

ムードつくる下手さを女はがゆがり

十七にとっちめられる仕儀となり

恋愛はうちには出来ず見合にし

やさしくすれば男勘ちがいする

聖火とは何んにも云わぬコマーション

呉市 林野 魁光

ライバルに思はず会釈してしまい

年寄りには座れるものと思うバス

お見合はしてもせんでも娘は嫁く気

岡山市 服部 十九平

エレベーター主人と二人で照れ臭し

惜敗の子がサロンパス貼って泣き

落魄の恩師を誘うどじょう汁

争えぬ血筋五才で万引す

尼崎市 長谷川 三司

再婚もまんざらでない男親

初恋の思出線香花火にも

岡山県 田村 藤波

今からでも遅くはないと自首に連れ

人並の子では満足出来ぬ親

不人情に泣いたアルバイトの日記

児島市 本田 恵二郎

野菊だけ摘み残しゆく墓掃除

明けて立つ樹々うっすらと霧まとう

堺市 高崎 雄声

置場のように老人まつられる

大掃除好きで上司に認められ

監督のようにビルの工事を見上げてる

島根県 藤井 明朗

薄情にされても純情気がつかず

薄情な夫と思う子が居らず

倉敷市 野田 素身郎

秋の夜の幸福お側で針仕事

視線を感じた時からタイプミスを打ち

理屈はあるもの反討論に聞きほれる

空腹をこらえ鍵っ子とんぼ追ひ

芦屋市 丸川 初甫

七夕かそうかとビール飲んでる

岡山県 池田 古心

得心をさすのにデニスチャー汗をかき

縦貫道我家立退くよう通りや

東京都 石居 高志

晩酌を養子は細うほそう飲み

今少し飲みたい上司の家を辞し

墓参り車待たせた急ぎよう

人生はふと吊り革にさえ頼り

大阪府 早川 清生

教員室にうどん屋の番号

銭湯に浮かす二十三円の軀か

後妻きて蚊帳たたむのが僕の役

総社市 野々口 美舟

先走るやうに外地のことをきき

こびを売るしよさで煙草に火をつける

大阪市 橋高 薫風子

熊野権現



神澄めり鳥の羽音さえひびき

漣にて

秋の漣どの岩も日のぬくみなし

菅橋彦作品展

めしの字に酒の字に秋来たりけり

木犀の香に天照大神

神戸市 仲どんたく

ゴルフ焼ですかへ釣とへりくんだり

昨日から背と背を向けたまま

刀自今日も読経の中に半眠す

博士八十尚ホルモンを研究中

平田市 久家代仕男

アベックで米いとベンチは虫しぐれ

亡き妻の無理思い出す秋日和

仏壇へお前の好きな菊を切り

大阪市 本多 柳志

悼 文蝶

文蝶忌紺屋高尾はもう聞けず

高浜海岸

ポスターはざこねさすとは書いてなし

出雲市 原 独 仙

水鉄砲孫の機嫌へ濡れてやろ

蔓枯れの西瓜に等し老妻の

秋立ちて一そう淋しい嫁きおくれ

西宮市 野 呂 鶴 汀

不便なるここは名士の別荘地

一匹の蝶が気になる都会の子

百円の貸して善人寄りつかず

朝顔が枯れて庭戸を閉ざされる

新潟県 高野 不二

雨風におびえ農夫の深いしわ

長女出生

ひいき目が美人の相ともう見てる

ビール減らさにやなるまいミルク買う

大阪市 石 倉 旅 風

あれぐらいならばとはいる踊りの輪

旨い娘を追うて見ている盆踊り

金持ちと言うから聞けば億もなし

児を抱いて毅然と歩道わたる母

カタカナがやっぱり生きていた事務机

誇る気は無いが貧乏悪くなし

貧相な顔して金は持っている

大阪市 魚 住 満 潮

続・西成界わい

硝子のダイヤ酌婦の手に光る

ベレー帽を被り莫銭もなし

あぶく銭朝から飲んでいる夫婦

パチンコ屋を右へめし屋を左へ露路の奥

麻薬運ぶ男にまでもなり下り

アパートの火事居候も焼け出され

帝王切開までして父無子が生れ

刑務所を出た鼻先へぶうんと女の匂い

大臣の嘘つき奴地下鉄倍になり

愛媛県 村 上 旭 童

早抜(二句)

慾しいのは水だポンプを買ったとて

海水がにじんで米そう島の井戸

早稲の穂が出たのを雀もう見つけ

学校へ歩いて行かぬ子に育て

女の脚のすばらしい海

達筆で不義理をわびる伯父になり

高槻市 傍 島 静 馬

オリンピックスリも手ぐすね引いて待ち



表通りだけは五輪の道が出来

早よ死んだほうが得やと通夜の愚痴

不景気になって経費がよく目立ち

大阪市 河井庸佑

ダークホースとおだてて仲間へひき入れる

米転という名で支社へほり出す気

大阪府 谷沢好祐

病院へ入れと<sup>はい</sup>医院に見離され

ダムもビルも土堀る無名の手が作る

不良誌のよくまあ同じことばかり

会社には逆らいカンパへ協力し

愛媛県 榎紫光

不具の子の正直だけを頼りにし

いたわしや十七才でもう墮し

脱ぐ役を蹴ればスターの座から落ち

のどもとを過ぎて憲法かえたがり

青森市 工藤甲吉

我ある日酸素を求める金魚に似

相撲から相撲一年早過ぎる

テクテクペコペコテクテクペコペコ靴ちびる

老農の頼ヒズミをそのままに

我が上に人のつくった人がいて

役人のふところ黒い金入る

松江市 小林孤呂二

住込の便りのなかに飯の味

中元のビールあるよと誘われる

豊中市 林夢虹

老醜の飯粒を胸につけ食い終り

白桃をむく裾の乱れに気がつかず

初恋を溶けばこの青か若狭の海の

牛の背に王朝の恋思っている

宝島ついに踏まずに水夫死す

大阪市 今西章雅

夏草の中に寝釈迦は熱く灼け

高校野球

零続く熱戦の腫に赤トンボ

ドジ踏んだネと捕鯊悪びれず

積文蝶つけた坊主もしゃれている

目もあかぬ仔犬を末っ娘拾うてくる

京都市 室井八九寸

千年の杉が頼頼抱くお寺

藪入りの誰にも気兼ねのない西瓜

ついてけない運動逃げるアルバイト

岡山県 横山一声

求婚をすれば月給幾らです

夫婦げんか高価な品はよう投げず

冷蔵庫ほしがる内に秋となり

小松市 関戸宗太郎

注射して来たのに孫へ奇慮丸

力士名にしたらと思う峯が晴れ

尻に火がついて公僕野に下り

折伏に来たあの人も事故で死に

美禰市 安平次弘道

体位向上娘は外股で歩き

病名をにごせばガンにしてしま

法律をたてにやせてるのがりきみ

宇部市 平田実男

親の目を意識しすぎたのが転び

カロリーにこだわり過ぎた味になり

富田林市 浅川八郎

不渡りへ部分品でしかない俺

世話ずきをおっちょよこちよとは怪しからん

遺言より生前贈与二号さん



岸和田市 内藤きさ子

色白の姉に不幸がつきまとい

灸すえに誘うてくれた秋の風

三日月を教えてあげても知らぬ顔

青森県 木村 凉人

そろ秋約手の期限迫りけり

農学校出て役人になりたがり

邪魔でないとこで雑草子をはらみ

奥さんと呼んで女房にドヤされる

倉敷市 奥 谷 弘 朗

案内があまり早くて日を忘れ

ニコヨンに幸福がありコップ酒

汚職する度胸なぞない小役人

兵庫県 遠 山 可 住

手っ取り早く女は三昧を習い初め

みどころのある奴金は持つとらず

兵庫県 河原みのる

丹羽福住本陣料亭

西園寺公今や飲み屋のピーアール

ハNSTが本音を吐いたやせ我慢

姫路市 隠 岐 不 酔

それでもと医者かえてみる親心

鳥取市 清 水 一 保

ソロバンと別に祖先の田を守り

ロケットで近頃詩情の湧かぬ月

公私共多端紙くずばかり殖え

出雲市 中川 晃 男

停年に殉じて靴もすり切れる

木書雑感

雨止まず有線放送避難指示

水引いて荒肌さらすわが故郷

松江市 柳 楽 鶴 丸

それどう云う意味と妻のこわい顔

空港に貧乏人は僕一人

京都市 都 倉 求 女

指定席それでも帽子おいて立つ

立読みへ本屋の主人も混ってる

兵庫県 大江 秋 月

話かけよいローカルの車掌さん

後悔のするパチンコと知って行き

方言もまねて司会のぬかりなし

大阪府 松 田 半 月

無い袖を振って大きな石碑立て

姑は名優とても足袋はだし

今治市 越 智 一 水

障子紙夏の暑さへ売りにくる

スタンプをやたらに山の局でつき

曼珠沙華少年剣士に折られたり

出かせぎの父は帰らぬまゝ祭

竹原市 山内 静 水

誤解されそう寡婦米くずをとってくれ

財布は別々女は酎を飲み

笠岡市 高 木 桃 里

山売って村長となり田も放す

不潔な一泊靴ベラが湿り

売店の娘も泣いていた幕が下り

五輪音頭の輪が校庭を狭くする

新居浜市 小 林 孝 正

さめざめと泣いて女は気を晴らす

裁ち鉄に生き再婚へ振り向かず

部厚き辞書の重みに少年耐えている

母よりも女中になつく子がいとし

一言も云わない妻の眼を恐れ

琴の音も哀しき過去を持つ人か

A少年理想の高い付を持ち

明日は明日今日を血を売る列に居る

大阪市 賀 本 昇

馬鹿笑い知能指数を疑ぐられ



# 川傍柳初篇研究 (二〇〇)

丸十府 高須啞三味  
岡田喜代人  
清博義  
藤井和雄

230 下向すると海になるいゝ間合

秋江

高須川わからぬ。「下向」とは「都から田舎へ行くこと」だが「位の高い人が地方へ行くこと」の意もあるから、誰かそういう人が、そこへ行く時、丁度そこが海になる、つまり潮がさして来るといふことで、稻村ヶ崎の逆であるが、そんな故事はないか？ お教えを乞う。

前田川「海」は、深川の佃新地または品川の異称。いずれも海に臨んだ遊所。「間合」はすさま。「下向」は、神仏に参詣して帰ること。で「下向地」は、もちろん海晏寺か正燈寺。

清川海晏寺の紅葉見物と品川妓楼を詠んだ句と解する。紅葉見物も終わり、さて山を降りはじめると、丁度いゝ具合に、そこに品川妓楼がある、との句意。  
若イもの来て大海のふたを取り

(安七天一)

海のみた取るは二かいの窓せうじ

(宝十天一)

いずれも品川妓楼の二階を詠んだものが、こゝから眺める海の展望は、すばらしいものであったらしい。

藤井川高須説によつて「下向」を考えると、業平の東下りがあるが、それには「海」がない。で、行平の須磨行きと見れば、例の松風・村雨両嬢がいて、丁度「いゝ間合」となるが、どんなものであろう。  
丸十難解句。「下向」は、前田説の如く神仏に参詣しての帰りの意があるので、下向にはあばたで戻るぬけ参り

(タル五)

檢校の江ノ島札参りと見当をつけたが、びつたりせず、藤井説の行平かと思へど、「海」で海女の松風・村雨を現わす無理が気になり、結局いまだ解釈のつかぬ難句の一つである。

岡田川豊前国(福岡県)門司、早瀬明神

高須啞三味  
前田喜代人  
岡崎重義  
清博義  
藤井和雄

の和布刈(めかり)を詠んだ句であろう。

毎年大晦日の深更に行なわれる神事で、垢離潔斎をした神主が、鎌と炬火を持って石段を下りると、トタンに汐水が引く。その一瞬に鎌で和布を刈って石段を上がると逆浪が押しよせて、再びもとの海面になるという。

真つ暗な夜宮他国にない神事

(タル二九)

年波の底に和布刈の神事なり

(タル一四五)

一鎌であと白波の神事なり

(タル四九)

ぬらくらとして刈られぬ神事なり

(タル二九)

等々沢山の句がある。主題句の「下向」がおかしく思われるが、この神事をテーマとした謡曲「和布刈」に

「神主松明振り立て、御鎌をもつと岩

間を伝い、伝い下つて半町ばかりの和布

を刈り、帰り給えば程なく跡に、汐さし満ちて元の如く、荒波となつて波白波のわたつみ和田の原」

とあるのからしても「下向をする」とは和布を刈つて戻るとの意にとつてよからうと思う。

前田川和布刈神事。旧晦日から一月一日にかけて行なわれる。対岸の下関の住吉神社の和布刈祭と同様、この地方における大切な祭事の一つである。神功皇后のお言葉奉じ、共に壇の浦(早瀬)の和布をとつて、元日の供物として献じた故事によるものだと言う。この神事と解されたのは、さすがに岡田先生で、毎年この行事に参加している私が、気がつかなかつたとは、何とも赤面ものである。

丸十岡田先生の御明解に感謝！ これでも永年の難解句が一つ解決したわけ。

高須川岡田コーチの明解、さすが一つ。目が開きました。

231 後家になつても養育金日に三分

魚交

高須川これは、越後高尾の句であろうと、富士野鞍馬さんから、お教え頂いた。

——十代目高尾は、榊原政岑に身請けされたが、榊原侯は寛保三年(一七四三)に死んだのに、高尾はそれから尼となつて蓮昌院と号し、寛政十一年(一七九九)八十四才まで生きていた。その五十六年間を「日に三分」と言つたのであろうが、その算定法は判らない。越後高尾(榊原高尾)の句は「川傍柳」にも、数句見える。

二度目は夕に掛ける十五貫目(初五)

其日から禿の禿名を替える  
縮着る高尾紫式部なり  
連理の枝は紅葉と禿なり  
くれないは禿へ植えてかくれなし(三三二)  
二代目はむつの花さく国へ行き(四一七)

(初23)  
(初41)  
(三17)

前田 吉原の上妓の揚代は三分。それで、揚代でない養育金も三分と、言っただけで、暗に高尾が後家(尼)になったことを詠んだもの。艶のない句。

丸 貴。この句「日に三分」が、大な意味をもっている。但し、句としてはつまらぬ句。

岡田 同。

232 おく病さ舟の廻りて斗力捨ひ

鼠 弓

高須 沙千狩の句で、臆病なのが、乗って言った舟の周囲でばかり拾っている、という句である。

清 川 川端 泳げないと、膝までぐらいの海水でも恐いのである。

丸 貴。岡田 同。

233 柳から気力なふして聳帰り

眠 狐

高須 柳の問題で、先に出た「父は柳、母は桜だと思ひ」(3才)の柳桜と同様、いろいろに解釈され、

聳ばかり兩國橋へ出て帰り (管初)

という句があるから「柳橋」ともとれるが、この句の場合は向島「梅若塚の柳」と見たい、とは富士野鞍馬さんの御意見であり、左の類句をお示し下す。

隅田川妻がくどけちなやつ

(玉19)

聳の表徳を帰柳とつける也

(傍初36)

内の雪隠へ隅田から聳帰り

(二34)

隅田川向うの人は聳ばかり

(二二五)

要するに、聳が一行の吉原行に同行せずそこから家へ帰るのである。

前田 此の句、後出239といささか関連がある。聳でなくて柳を詠んだ句をあける。あわれな柳さえ売ると女房言ひ (安八仁)

花よりも柳のわびはもつれたり (タル一)

清 此の「柳」は、向島梅柳山木母寺の梅若忌を意味する。この梅若忌には柳とはいうもの夾は桜なり (タル二)

と、梅若忌にかこつけて、吉原に渡る遊客が多かった。しかし、入聳は、そうはいかない。

入聳のつらさ花なら花つきり (タル一三)

入聳のへのこ紅葉で帰るなり (末三)

聳ひとり兩國橋へ出て帰り (管一)

と、梅若忌だけで帰らなければならぬ。丸 此の「柳」は、礎橋でいわれるようにいろいろに解される。「柳橋」の柳、木

母寺梅若塚の柳、吉原衣紋坂の見返り柳等々だが、小生はこれを見返り柳と解し、強引に誘われて日本堤を衣紋坂の処まで来たものの、もう一步というところで臆気がつので、「気力なふして」の表現を些か生かしたつもり。

岡田 類句から推して、この「柳」は、舟宿のあった柳橋とも、また梅若塚の柳とも解せられる。だが、それよりも、この句の「柳から気力なうして」が、謡曲「遊行桜」の「柳気力なうして弱々」との文句を取って作られていることに注目する必要がある。

234 笠あてをかぶって橋に馬鹿な形 (タル五)

同

高須 笠あてとは「笠の頭につける部分」のことで、旅行者などは、そこへ紐をつけて、アゴへ結んでいるのが普通である。それで、田舎者が橋へかゝって、川風に笠をふっとばされたが、その笠あてだけ残ったその恰好のおかしさを笑った句で、絵にでもすればともかく、川柳としてはさうおかしくはない句である。

前田 此の橋は、色気に縁のあるものでないと、面白くない。そうでないと「馬鹿なナリ」が生きて来ない。日本橋にとれそうだが品川の行合橋にとりた。

品川の橋を越すのは否いやつ (タル五)

藤井 ありそうなこと。飛ばされた瞬間であろう。

丸 貴。岡田 礎橋の通り。 235 癖のあら大きくみへる目鏡也 同

高須 お姑さんの眼鏡で、あれでは嫁のアラも、大きく見えるだろうと、嫁に同情した句と見てよいであろう。

前田 嫁に同情、即ち姑の情のないといったところ、類句が多いが、眼鏡(老眼鏡)を出したところ面白い。

川端 貴。老眼鏡は凸レンズだから、もの大きく見える。

丸 礎橋に賛だが、川端説も加わって面白い。

岡田 同。 (十四ウ)

236 禿来てなんとかいふと立て行き 眠 狐

高須 禿(カムロ)というのは、吉原の

品質優良

**先カペン**

TACHIKAWA PEN

大坂市東区智恵町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ画紙  
タチカワ

オイランの身の回りの雑用をした女の子  
 (まれには男の子の「男禿」というのもいた  
 が)のことで、六、七才から十二、三才ぐ  
 らいまでで、十三が禿の定年であったが、  
 とにかく可愛らしい禿のしぐさは、古川柳  
 に多く詠まれ、山路関古さんは四百句に及  
 ぶと書いていられる。

禿来て鼻から煙を出せと言ひ

(タル三)

など有名な句であるが

傾城のれきき禿二人連れ

(タル二〇)

は、二人禿の「お職」である。

禿を袖にぶらさけて逃げるなり

(タル二二)

なんて句もあり、何となく可愛かったもの  
 らしい。

前田二贊。「来て」は説明的であるが

「なんとかいうと」が、含蓄性をもってい  
 て、佳句である。

清二「なんとかいう」は、遊客か？ 禿

がジヤマなので、席をはずさせたのではな  
 かるうか？

藤井二「なんとかいうと」は、前田説通  
 り含蓄のある表現で、清説のジヤマにした  
 のでなく、客にいたずらされたことのある  
 禿が、早々に逃げ出したのではなからう  
 か。

丸二「立って行く」のは、禿ではなく、  
 遊女の方である。もちろん禿も一緒だが

「なんとかいう」の内容は、なじみの客が  
 来たとか何とか、いろいろ。

耳へおつけ損料やが来やした

(37ウ一)

岡田二丸先生の「馴染客が来た」説に

贊。

237 ほしか船母おさらばよく

鼠弓

高須二「ほしか船」とは「干鯛船」のこ

とで、千葉銚子辺から、江戸へほしか(脂  
 をしぼった鯛などを干して、味出しに使  
 う、現在の「いりこ(煮干しのこと)」を  
 積んで来る船で、それへ母が別れを告げて  
 いると言えば、もちろん勘当息子の句であ  
 る。

前田二わからない。

岡崎二礎稿贊。

藤井二昔の道楽息子のたどるコースの終

着駅は、銚子行きときまっていた。

丸二礎稿、藤井説贊。

の、さまを二度うけ合て銚子なり

(タル一七)

銚子からさすらへの身としやれた文

(タル六)

岡田二贊。

238 たった三年とんせいを報ハする

一甫

高須二松岡山東慶寺の句。この「三年」

というのは、離縁の成立するまでの、東慶

寺の修行期間であるが、五世用堂和尚の時

から「二十四カ月」と改められた。即ち  
 「足かけ三年」でよいことになったのであ  
 る。例句は沢山ある。

松風を有髪の尼で三とせ聞き

(タル二四)

三年は在鎌倉と覚悟する

(タル二二)

せんたくに三年かゝる松ケ岡

(万安五)

男というもの千日見ずにいる

(タル三〇)

三年のうちに月代すりならい

(傍二)

三年のうちにお経もよみ習い

(傍五)

三年のうちに齒もはげ眉もはえ

(傍初)

状一本とるに三年嫁かかり

(玉柳)

六郷を静かに越える三年目

(傍五)

丸二もうすっかりハナについた松カ岡

句。言うことなし。

岡田二こんな判りきった句には、礎解以

外なし。礎稿完全。

239 古塚のたゝりと母へト者い、

一甫

高須二母が占者の所へ行った、すると占  
 者がそれは「古塚のたゝり」だと言った、  
 という句だが、その母が「何を占って貰っ

たか」また占者のいう「古塚とは何か」  
 が、この句の問題であり、いろいろ考えら  
 れるが、的確な答えが出ぬ。御教示を。

前田二「古塚」とは、伝説の梅若丸の

塚。向島梅柳山木母寺にあり、三月十五日

の命日供養は大変賑わった。そして、それ

を利用して吉原に遊ぶ者が多かった。この

母が占ってもらったのは、どちら息子のこ  
 であらう。

梅若の亡霊むすこ乗り移り

(安二宮2)

梅若は死んでしまつてよくうられ

(天五桜2)

あまい酔で梅若をまた母はくい

(タル二三)

丸二「何を占ってもらったか」いろいろ

考えられる。前田説の息子の放蕩、娘の劣

咳など。既出の

67女の世話に成つてるとト者い、

(4ウ)

なんて場合もある。「古塚のたゝり」な

どと言うのは、易者の常套句で、直接的に

は梅若塚を指したものでないが、それを

暗示していると見てよい。以上から前田説

に贊。

岡田二前田説贊。但し、息子が行方不明

で、帰らぬからである。それで、易者に見

てもらった「古塚のたゝり」だと言ったと

の句だが、この句も謠曲「遊行桜」の文句

「朽木の柳の古塚に、寄るかと思えて失せ

にけり寄るかと思えて失せにけり」を踏まえた作である。

240 新らしい金を二八に崩す也

燕子

高須「新らしい金」というのは「新鑄小判」ではないかと、古句に詳しい富士野鞍馬さんに聞いてみたが、この句の詠まれた安永九年頃には、新吹き小判はないから、この「新らしい金」というのは「きれいな小判」ぐらいの意で「二八」は蕎麦だと教えられた。

新そばに小判をくすす一さかり

(タル初)

の句はあるが、左の類句数句から、この句は、吉原の「敷初め」の句であろうとは、鞍馬さんの教示である。

痛いこと二八で見世の軒を埋め

(玉柳)

夜着蒲団吉原中の蕎麦を食い

(拾六)

蕎麦の膳下げて新たな床をとり

(筥二)

女郎が客にこしらえて貰った蒲団を、初めて敷いて、その客と寝るのを「敷初め」と言い、そのとき楼内一同と関係筋へ蕎麦を振舞った。その蕎麦代はもろろ小判で払うぐらい要ったであろう。

前田「新らしい金」がわからぬ。敷初

の振舞いそばにとらなくても、とにかく新しい金を、十六文のそば代でくすした位の解でよいと思う。

藤井「新らしい金」は、今ならさしす

め折目のないパリッとした一万円ザツを、高級バーの女給達にわたした所か? 「敷初め」のソバ代とは、鞍馬先生明解。

丸「同。評釈でも、柳「まさか敷初めにでもあるまじ」三「敷初めかも知れぬ」と言っている。

岡田「敷初め」には、必ずソバを振舞う習わしだったが、楼中全部に振舞うのであり、大金のかゝる豪華な三布団を贈るぐらいのお大尽であるから「それソバ代」と、小判何枚かは投げ出したろう。その他に、きのじ屋の料理なども幾つかとったろうから。で、敷初めで「小判をくすす」(すなはちツリをとる)ということとは、有り得ない。わずか十六文に、一両を出して小判をくすすのは、これから吉原へ遊びに行く手合いであろう。「新しい小判」は、こゝではピカピカした小判。おそらく親父の大事にしまひこんでおいたのを、この息子くすねて来たものか。

241 袂をバ先へ廻してよめの礼

水砥

高須「読んだ通り「嫁の礼」の句で、はじろう花嫁の所作を、キレイに詠んでいる。お初にとばかりしゅうとめ盾にとり

(タル初)

と同じだが、これは袂を盾にしている句である。

前田「嫁の礼」は、花嫁が姑・仲人・

親類の者に連れられて、町内を戸別に挨拶

してまわり、またその里方へ花嫁が正月の年礼にまわることである。句意は高須説通り。

嫁の礼素晴らしいほど着て歩き

(桜17)

丸「贊。但し「袂を盾」にしてとまで見なくてもよいのではないか。

岡田「同。

242 三文判はいくらだとたわけもの

五丸

高須「三文で売っていたから「三文判」と言ったのであろう。それを「いくら」だと聞くのは「たわけもの」だ、と言うのであろうが、この「三文判」とは「二束三文」の意の三文で、本当に一文の三倍の三文であったかどうか疑問で、この句そのものが「たわけもの」だと言いたい。ポクの青年頃は、それこそ五銭か十銭で、レイ書ともテン字とも判らぬ、へんな印判を売っていたが、この五、六年前から「印形も判らぬ文字は不可」という規則になって、すべて改印させられたから、現代ではもう見られぬ「三文判」となってしまった。

前田「三文は、本当の三文と思う。もちろん句そのものが「たわけもの」でなくて、すなおにそのものずばりの解釈にした。他意はない句。

岡崎「前田説に賛。

清「すばりの解釈でよいと考える。この男「三文判」という判があるものと考え

て、その値段をきいたのであろう。

藤井「午後三時二十分発の上りは、何時に出ますか、といった落語を思い出す。

丸「贊。岡田「同。

川柳「研究(18)訂正

13頁四段3行目「松が岡」ハ「松が岡」

9行目「4才」ハ「4才」

14頁上段31行目「という句が」ハ「という句で」

34行目「高須」ハ「高須」

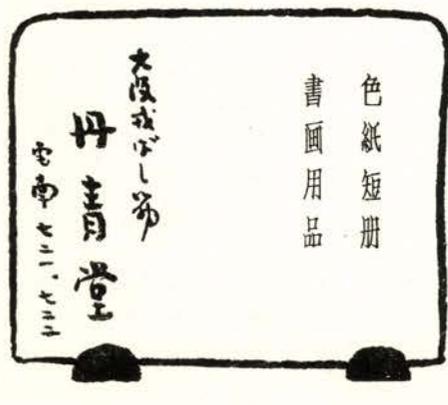
二段一行目「じみていた」ハ「じみていて」

7行目「そうハなし」ハ「うそハなし」

21行目「(13才)ハ(13才)」ハ「13丁オモテの事」

四段2行目「ないのが」ハ「ないのが難」

15頁二段11行目「しよと言った」ハ「しよ」と言った





# 現代川柳の中 の傳統性

今野空白

何でもよい。小さなものでも、固くても柔らかくても、形のものでさああればよい。但し不潔なものは嫌だ。一寸の午睡でもやはり枕というものは欲しい。例えそれが貧しい自分の片ひじであらうとも……。やさしい人の睡枕ならなおい。悪い癖か、良い癖か、頭にも、枕がなければ眠れぬ私である。寝に暫くは静く事も、作句も不勉強な私には、絶対と云つてい、枕が必要だ。併し、文章の枕は、即覚めるための枕で、眠る為のものではない。良い枕を探さねばならぬが、今の私にはその余裕がない。

——詩的知識は、直覚的なものでも、蓋然性のあるものでも、秩序のあるものでも、首尾一貫したものでなく、自己矛盾のもの、提示を超えたもの、証明を超えたものである。われわれはそれを、確信によって認容するか、又は少しも認容しないかである。われわれはそれを、他人の苦痛や愉悅を信ずると同じやり方で受入れるか、或いは、それを、納得できないこと、不誠実なこと、又は無秩序の徴候として、排除する。何と多くの悪い詩が、単なるあわれむべき空感張りであり、自己主張の作り声であることか！ 詩的真理とは全く、個人的真理に外ならない。それは生活経験から、そして経験自体からのみ、生ずるものである。詩は普遍的なものでもなく、それは知識でもない。——カール・シャ

ピロー（「詩と詩論」福田陸太郎訳・国文社・昭32）

少し派手な、大きな、外国製の枕で、私には似つかわしくないけれど、当り前の理論であつて、今迄にも、誰か、何処かで、散々使い古した枕であらう。古着屋の店頭の色あせ乍ら吊されているものであらう。それでも、やはり、私には何時迄も真理で、なじみ易いものに見える。

ところで、現代川柳の問題に就いて筆を進めなければならぬのだが、差し当って特別に書く事がない様な気がする。というのは、最近川柳やその周辺のものから遠去かっていたので、何の興味も持てないのである。わざ／＼遠去かっていたと言えは嘘になる。近付けさせない何かがあったのである。それは何か。現代川柳の硬さ、昔かからのかけら、面白なきさ。それと相かわらずのトリヴィアリズム、真のユーモアから遠い幼稚な笑い、ウィット、皮肉、諷刺等はばかりを盛り込んでいる、廉価で且つ

質の悪い、大衆食堂の陳列棚を見る様な気がして、少しも食慾をそそるところか、却って悪心を催させるばかりだったからである。

だが、食慾のないのも当然、起きたばかりでは仕方がない。又、見るべき店、財布の中を確かめないで、又、視るものを視、歩く事もしないで、文句だけ言っていて、それも、それは怠惰以外の何ものでもないだらう。

手許にある句集や柳誌をひろげて、少し現代川柳に触れてみる事にしよう。

かつて現代川柳の特徴の一つとして、女性川柳家の進出を川上三太郎氏が書いていた（昭30・9「川柳研究」）。それは川柳というものが、卑俗、猥雑でなくなり、子女が作ってもおかしくなくなつて来たが、短歌とか、俳句より自由闊達なところが、認識されて来たのである。此の事は、股前の柳界の事をよく知らない私にとつても、確かに現代川柳の一つの大きな発展であると思う。時代の変化と共に、男女同権、女

性のものの考え方の移り変わりが、自然と川柳へも進出し、今日の目覚ましい活躍を見たものであらう。

秋ひがん笛吹いてくれないかしら  
とどまれば倒れる風を切つてゆく  
（「新子」）

愛はいま巾旗を垂れた祝辞である  
真澄（39・5）「川柳研究」

例句が少く、適切でないかも知れないが、此処には、三人三様の女性像がある。リリシズム、自虐精神、静観的態度。殊に新子、真澄の句には、現代に生きている女性の息吹きが感じられて来る。「風を切つてゆく」新子は、股前にもいた。例えば林

美美子等がそうであらう。この逞しさを表現して見える女性は少なかったに違いない。しかも、その情感に溺れず、自己の姿勢を客観視している事は、女性には少ない立派な作句態度と言える。同じ事が真澄の句についても言える。センチに走つたり、リリックに流されたり、又、内向性の陰湿さを感じさせない、自己を含めた世界の凝視の眼がある。

秋死せり 神より温きオーバー買う  
著之助（39・9）「馬」

明快なジャングル  
都会は  
無智な母性で居る  
錆びた太陽の下でひるめし  
（「傷冬」）

神が亮る安きてんがら子と買ひし  
富二（「富二句集」）

右にあげた作品群には、現代のアイロニーがある。著之助の作品は、△神▽という現代社会より冷たいあるものへの忿懣をブチまけたと言つては作者の對して迷惑であらうか。だが、日本人には元来、△神▽とい

右にあげた作品群には、現代のアイロニーがある。著之助の作品は、△神▽という現代社会より冷たいあるものへの忿懣をブチまけたと言つては作者の對して迷惑であらうか。だが、日本人には元来、△神▽とい

右にあげた作品群には、現代のアイロニーがある。著之助の作品は、△神▽という現代社会より冷たいあるものへの忿懣をブチまけたと言つては作者の對して迷惑であらうか。だが、日本人には元来、△神▽とい

右にあげた作品群には、現代のアイロニーがある。著之助の作品は、△神▽という現代社会より冷たいあるものへの忿懣をブチまけたと言つては作者の對して迷惑であらうか。だが、日本人には元来、△神▽とい

右にあげた作品群には、現代のアイロニーがある。著之助の作品は、△神▽という現代社会より冷たいあるものへの忿懣をブチまけたと言つては作者の對して迷惑であらうか。だが、日本人には元来、△神▽とい

う意識は持たれていない。あるのは形式上のもので、祖先の神格化だけである。生まれるとすぐに、キリストの洗礼を受けたり、毎日曜に教会に行くという様な生活様式で育って来た外人の△神Vと、日本人の△神Vとは、自ら異質のものであろう。

茲では、△神Vに就いて述べた事を差し控えるが、蒼之助の△神Vに対する考え方も、日本人の個人々々によって、非常な差異がある筈だ。富二の△神Vも蒼之助の△神Vと大同小異であるようだ。柳人の見る、殊に所謂革新派の見る、そして題材とする△神Vには共通点がある。対外的にテーマとする此の事は、日本人全般にも共通するものであろうか。

宝くじを買うこの時神ののが笑ひ

勝次郎（「裸燈」）

之も同じ姿勢である。だが、見落す筈もなからうが、右の作品何れにも自嘲が含まれている。これが現代人の持つアイロニーと言えそう。

神風に懲りて商ひ船斗

（柳多留十二）

神風に豚や羊のへどを吐き

（十九）

神を引連れれたの巴だの

（古川柳）

神事だなどと親分気の若さ

（柳多留七）

古川柳には適当なのが見当たらないが、△神Vというものの概念は形而下のものにしている様である。一、二句は元寇の神風、三句のは遊蕩、四句目は所謂△神事Vで子をこしらえた親分のテレ。

芳味は三行に分けているが、一行にしても表現効果に大した差異はなさそう。それでもやはり、「無智な母性」が、ズラ

く一行の下の方で出て来るよりは、多行形式にした方が、作者の表現意図は判る。「明快なジャンル」に一寸ひっかかる。「明快」なだけに「無智」と結びついたら、この作品としては計算された構成だ。注夕の作品と共に、大きな社会構成の中の個人が、如何に小さく、おしひしがれて生きているかが判るアイロニー溢れる作品だ。伝統の諷刺が、現代では、この様に活躍している事は、川柳をやる意慾を振いたさせるに充分である。

真つ赤な血の

花

まくら木に咲き

下人生きている 芳味(39・9「馬」)

は、例の松川事件や、下山事件を想起させる作品だが、殊に前者を意識して、叫ばずに居られなかったとすれば、気持は判るが、余り事実在即しすぎると、歴史的資料としての価値のみで、つまり時事川柳的で、ポエジーとしては価値の少ないものとなる。

矢印について曲って消える炎天

春三(39・9「馬」)

遮断機が上ると

首が

地に落ちた 芳味(39・9「馬」)

背中は海を見ている植物であった

富二(39・7「しづをか」)

劣等感の微笑をメガネから拭く

川柳（「考える章」）

マッチをすったら唾の時間が噴いた

同右

右の作品群には、△軽みVが感受出来る。それは、描写のタッチの軽さは勿論だが、ニュアンスに奇妙な△軽みVがあるか

らだ。春三の「炎天」と題材は同じだが、逆の作品をあげると、矢印の矢の方向へ夏日燃ゆる

勝次郎（「裸燈」）

があり、対蹠的だ。明暗の△軽みVがある。

白昼の呪詛燃ゆるとき巫子酔い伏せり

哲郎(39・9「馬」)

は、同じ炎天の様だが、これには△軽みVはない。題材はめくるめく如き、白日を思わせるものばかりだが、内容は逆に底なしに暗いものを暗示している。

芳味、富二作品と、川柳作品とは異質の△軽みVだが、次元は同じ所にある様だ。

右の何れの作品にも△軽みVはあるが、従来のもではない。△軽みVは△軽みVでも比重の異なった△軽みVである。従って、ユーモアを感じるものと、感受出来ないものがある筈である。右の△軽みVとしてあげた作品には、社会という偉大な、無気味な背景の前に、或は下に、小さな自己、人間性を剝奪されかかっているちっぽけな人間しかない。だから、笑おうにも心から笑えない。自嘲に似た、淋しい笑みがかすかに浮かぶだけである。そしてどこやら、アンニュイがあり、ベソッスが惨んでいる。

明日へ向って土器より脆き骨となる

注夕（「偽冬」）

葬られて生き 致死量の米をとぐ

春三（「無限階段」）

抽象画糸を引いた蝸牛がゐない

真澄(39・5・「川柳研究」)

吾が旗の見えざる者に振られたり

千賀夫(39・8「しづをか」)

右の作品群からは、△自己喪失Vの何ともやりきれぬ吐息が聞えて来る様である。

牛方のあきらめて行く俄雨

（柳多留二）

花の留守悠然として風を見

（古川柳）

などの古川柳とは、△あきらめV方の逆う△あきらめVが感じられる。併し△あきらめVでそれっきりでない。△あきらめVてい乍ら、生きやうかねばならない現代人の姿がある。古川柳には、人の影があきらかに映る。現代川柳にはその影が失われがちである。大衆の中の個人が隠れ失われる今日である。大衆というものが、個人の集団である筈なのに、一度その大衆が作り出されると、ちっぽけな個人はもみ消されて、個人の人権などは何処にか影すらとどめない現代ではある。

ふる雪につもるとしをばよそへつ

（かげろふの日記）

水鳥の水のうへとやよそに見む

（紫式部日記）

は唐木順三氏の「無常」(39・2・筑摩書房)からの再引用で、△はかなしVから△無常Vへの変換を乗しげに説いている。△はかなしVも△無常Vの精神も日本伝統のものである。それが古川柳には軽すぎるタッチの中に、又は笑いとばす諷刺の中にあった。それが現代では右掲作品の如き形をとらざるを得ない世相なのである。これを是認するつもりはないが、表現せざるを得ない作者のやるせないパッションを止める事は出来ない。ニヒリズムのニヒルは何を求めんとするか。不安と無根拠の中に求めるものは、絶対であり、権威であろう。併し、現代川柳は、これを拒絶する態度を見せている。テレビで子供達に人気のある

る「鉄腕アトム」の「鉄人28号」の「ビッグX」等は、現代世相の不安なるが故の一現象ではなからうか。デスベレート、ペシミズム、そんな不安なものを産出する要素が現代にあり、その中を小さな個人は僅かな良心と、デリケートな菲弱な腕で逆立して支えている地球がある。(茲で、注夕、春三、真澄、千加夫の作品に評釈めいた事を書けば蛇足になるからやめよう。)

しかも猶、次の様な作品も生まれているのである。

富二(「富二句集」)  
考えてると 無駄な重い塊である

同右

壁にはリユック  
歪むかしの

秩序が垂れる 春三(「無限階段」)  
悔いあらた昨日の飯に火を通す

新子(「新子」)

「うがち」Vと言つてよいだらうか。残酷なまでの凝視、それは自らを生かし続けながら、又自らを絶えず傷つけ痛めつけ続けるものである。しかし、詩人の魂として、これは今更捨て去る事は出来ぬ宿命であり、墓場の中まで運ばれていくものであろう。残酷であるが、苦しからうが、そんな事が嫌なら、最初から川柳だの、詩だの、とつけない事だ。

安藤次男が読売新聞(39・5・16)に「現代詩のゆくえ——春夫・達治の死をめぐって——」と題して次の様な事を書いていた。詩というものが時代の死を進展するなどという事は頭から信じない。しかし個人においては詩の成熟というものはあり得る。その成熟期間を如何に確実に持続させ得るかが大切だ。「詩を読むという

事は、自分の中のそういう契機を引き出すことだが、と云つて相手の成熟を計りそこなつたら、それこそ悪女の深なさけを受けることになる。」「一句一語の結晶度の高さに敏感でなければならず」、作者自身は絶唱を心掛ければならない。そしてヒョウセツに就いても、盗むべき詞と心をするべきであると、かなりパッションネートな口調で述べていた。

又、岡部伊都子の「風さわぐ」(39・3・新潮社)の巻末「行く人なしに」の中に、

——たった一字で、すっかりかわる意味や迫力。不完全な言葉で、表現せねばならない文字の芸術は、短詩俳諧ではつねにギリギリの燃焼をさせなくては冗漫になつてしまふ。価値を失う。作者の真実が、相手をうづつ力をもつには、その作品に、とことん煮つめた誠実な努力がひそんでいゝ場合だ。」

と述べている。短詩型文学のキビシさを突いており、又作者の誠実を要求しているのは当然の事であるが、この本の表題を「かなしむ言葉」としたかった「あとがき」を見て、一層心に残つた。

現代川柳界に革新派は、伝統を破壊するものの如き印象を、伝統派作家に与えている様であるが、右の拙い、引用が不適切な句の中にも、川柳の伝統の生かされている事を肯て頂ければ幸せである。伝統というものはたゞ引継ぐだけだが、伝統を守る法でない事は、今までに多くの人が説いたところである。バックボーンはそのままでも伝統は時代と共に新しく変貌すべきものである。それが伝統を真に生かす道である。定型の問題についても多くの人に説かれ

て来た。ただ定型発生、十七音字形態が、文語体から始まっている事を想起すれば、口語体の現在、十七音字が今日も守るべき形態か否かは問題があり、新しいリズムの定型が生まれてしかるべきであらう。

川柳の所謂三要素に就いては、これ亦評論が多い。現代に生かすべき再検討が叫ばれてからも久しい。だが、これも右に見て来た様に立派に生かされていると見るべきであらう。川柳は詩である。詩であるためには、一度墮落した狂句の汚名を返上すべき「諷刺」なり「軽み」Vの再建築又は改築、移転が必要であらう。「諷刺」Vを文学たらしめ、詩たらしめるには、余程の凝視、凝縮、昇華が必要である。単なるルポルターージュでは問題にならない。詩としての普遍性と、事実の裏の真実を見抜く眼、術(テクネエ)が要る。川柳人は常に、物事の批判の眼を養つている筈である。眼がなければ、物事の真実は逃げてしまふ。否、それより以前に己れ自身が殺されて了つているのだ。

モンターージュとか、メタファーとかは、この短い雑文では述べる事が出来ないが、短詩型の表現法としては大いに利用すべき方法であり、これによつて限定された形態が、無限に展開出来る内容を、表現包含させ得る可能性がある。事実、即事的、即物的な作品より、右に掲げた作品にはポエジーと共に豊富な内容がある。

ただ、現代川柳に就いて残念に思うのは、ハユーモアVの喪失である。大らかなハ笑いVに乏しい。殆どなく陰惨でさえある。それは個々が生きているのに精一杯でハユーモアVという大きなものにつながらない。ハユーモアVを忘却させているのであらうか。ハユーモアVをポエジーに昇華させ

る事は非常に困難な事で、問題は多いが、古川柳が見事にそれをやっていたではないか。世相がせち辛いからこそ、明るい唄が喜ばれる。世相が暗いからとて、暗い作品ばかりでは現代の世相というプールでの溺死である。

——ユーモアは、どうしても相容れない敵役をもっている。たとえば、あちらから、ドタバタ、くすぐり、悪意、やりかえし、皮肉、いやみ、根性曲り、意地悪、腹いせ、しっぺ返し、嘲笑、悪罵、からかい、その他をあげることができよう。

これらは、しばしばユーモアのごとく誤まって受けとられてはいるが、正しいユーモアとは似て非なるものである。

ユーモアは、つくりものではなく、ごく自然に口をついて出る言葉や、身についたしぐさの中にじみ出るものが、思わず誘う笑いなのだ。それは私たちの日常生活の中に静かに培われ、育つものだ。

金子登「ユーモアのすゝめ」(39・10・サンケイ新聞社)カバより

散々、引用文ばかりで申訳ないが、私の下手な駄文よりは、スッキリと物事の核心を突いて要領を得ているので借用した。むしろ御寛容頂けるものと思う。

どうせ借りた杖だから、又借りて欄筆することにしよう。

そして私はお前に再びさわる

お前が沈黙の中にカチリと音をさせて眠りに入るとき。——カール・シャピロ

# 私の句会論



東野 大八

最近そここの柳俳誌で、句会論がさかんなようである。そこで、私は私なりの句会についての感想をのべてみたい。

私は岐阜へ移り住んで久しくなるけれども、句会へ出たのはほんの数えるほどしかない。その一つに、私の勤めていた新聞社主催でいった句会がある。これは私が企画、立案したもので、夕刊用の読者対象の事業としてとりあげてもらったものだ。票議書から開会まで、ほとんど私一人でやっていた。新聞の偉力は怖ろしい一堂に百人も集まった。ただし半分以上が素人衆である。一般読者への呼びかけだから当然の事だろう。新聞社が主催し、地元吟社が超党派で共賛するというタテマエをとったのも一般読者が対象だからで、選者も革新、保守双方から折半してとった。この選者の選び方は、うちの新聞柳壇をかねがね担当してもらっている人たちをもつ

てきて据えた。

当時地元には、岐阜番傘の「鶴」があり、革新系では「人間像」や「創天」があった。いずれも相当自説に疑り固まったリーダーたちであった。(番傘系では篠田半面子、野口北羊。革新系は今井鴨平、清水汪夕というベテラン諸氏だった)私は岐阜にきたときは、どちらかの吟社に所属すべきが柳人としての当然の在り方だと思つたことだが、新聞編集人の立場からして、どっちつかずの白紙の立場にいる方が、仕事を運ぶ上には好都合だと判断し、完全に第三者的なところにいることに決めた。したがって新聞句会の場合、双方のキヤップに通じただけでスラ／＼とコトははかどつた。結果的にはそれでよかつたわけである。

さて、新聞社主催の大句会は、盛会だったものの、実にその人あつめのタネとなつたものは「賞品」そのものであった。二つの百貨店から五千円相当の現物贈与にあずかつたのがいふなれば賞品で「数が多くてカサ張るもの」ばかりをお願いした。このため天になろうと地に当たろうと、打ちあげた話、同じ三百円のセトモノ花瓶であったわけだ。つまり賞品の八割は参加賞(洩れなく)に食われていたわけで、高受賞者こそ悪くいえば「いいツラの皮」であつた。

句会によく「初心者歓迎」とあるが、実のところそんな連中が現われたタメシはない。柳人の縁故、乃至はよほどのもの好きが暇つぶしにくるといったものである。さきの句会は、そういう連中というより「参加者洩れなく記念品呈上」という字句につられた「欲の皮」のなせる連中の集まりであつた。

私は「講演」を誰にも頼まなかつた。社の事業部長一人に開会のあいさつをさせただけで、あとは兼題五つ、席題五つの披露でチヨンだった。

「柳人はこのサツパリした句会には百パーセント好感をもつた。そのうちの二、三人は「句会に講演などはやめた方がいい」

「われわれは句を作り、そして楽しんできたのだから、作句、披露それでいいのだ」

と交々いう。だが、こういう人たちは結局「賞品」にうつつを抜かし、作句の情熱よりデパートの包み紙に意欲をもやした。したがってなじみの選者向きに「あてこみ」をさかんにやつたようだ。もちろん、大きな包紙をうれしそうに抱えた高位入賞はすべてこれらプロ?の柳人諸君であつたのである。

句会の実質的主権者であつた私は、年中行事とするよう社に呼びかけ、社告にも「第一回」というのを大きく銘打って載せたわけだが、結局はこの一発で消えてしまった。消した奴は実のところ私であつたわけだが、その消した理由はこの種句会のくだらなさに愛想をつかしてのことであつた。

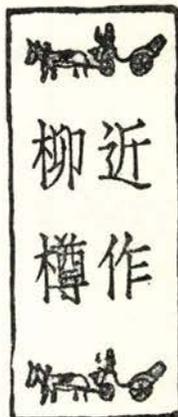
句会の玄人と、句会のくの字も知らない素人の格差がレキ然として、いることは致し方がないとして、「あてこみ」をやるいけぬやしい既成柳人のその罪の所詮は、しろうと句会とナメ切つたところからむき出しに出てきた。一方しろうと衆にも困つた連中がかなりいた。誰でも知っているような古川柳の句を平然と書き込みかたずをのんでいるという態たらくだ。こうなると柳界振興のための大衆句会もハチの頭もあつたものではない。

その次の句会は、某柳誌の新年句会であつた。この柳誌は、A級

選者を超党派的にスラリと並べて、全国の柳人を思う選者に投句させるといふ行き方をとつていたその主宰者にすればこれによって総合柳誌の面目と賞録をつけ、事業的にも成功させようと思つたものらしい。その柳誌の新年句会は、そういう選者を一堂に集めて花々しくデモストレーションに入つたわけだが、その句会のムードたるやまことに非情かつ、冷淡で、まるで女郎の張り店をおじぎして通るような具合であつた。プロ野球ならいざ知らず柳界A級のオールスターは、水と油のツポの上を霜夜の風がわたりすぎるようであつた。

こうした二つの例からしても、現行句会の定義は、私は「親睦」のほかには考えないことにした。その風交の座に同じ趣味グループに生きる歓びがある。このムードの中に、作句という方法なり技法がとられていたのであって、兼題、席題の「題詠」なるものは座興の一手段にすぎない。座興であれば、何も眼に角たててヤボなことを持ち出す必要はない。アットホームな空気が、そうした手段でプラスされていればそれでよいのだ。三光五客でいこうと、平拔一本で選句しようとして、座興の行き方は随意である。

(40ページ下段へつづく)



## 麻生路郎選

## 北川春巢選

あれがまああの子の母か P T A 仙台市 平野 光道  
 官服を着て鉢巻農夫を羨やませ 同  
 忙しい店へ集金腰おろし 同  
 男などと言ら、口紅アイシヤドー 同  
 テレビの子に離れて虫をきく妻と 同  
 実習生に子守をさせて床屋ヒマ 同  
 盲判印肉たかく盛りあげて 同  
 遠足へ扶助の子食い余すほど持参 同  
 許されぬ恋ペンフレンドのままで老い 同  
 桃色をさばくオールドミスのはヒス 同  
 害あって益なきたばこ国が売り 石川県 大山 雅城  
 請合った責任電話を逃げまわり 同  
 朝顔は四つ咲いても賑やかな 同  
 道枝の蟬はさかさになって鳴き 同

壊すこと上手ネーと励まされ 同  
 色にも重さあり醍醐寺の壁画 同  
 事故防ぐ道路拡げて事故が殖え 同  
 建物に時代の思想反映し 同  
 後世へ昭和建築としてのこせ 同  
 云い負けた余憤單車をふっ飛ばし 枚方市 宮川 珠笑  
 いんぎんに電話を切ってから罵声 同  
 不渡りのニュースが走る間屋街 同  
 口遅いわが子の大器信じきり 同  
 川の字がHなった寝苦しさ 同  
 葬儀屋のマイク馴れた声が呼び 同  
 親の前違った声で夫呼ぶ 同  
 バイバイを云う子へ外人さうなら 同  
 自然薯の様な女中で取次がず 倉敷市 水谷 谷水  
 そりやあうちの嫁ですのう言わず 同  
 納税賞とる気ですかと馬鹿にされ 同  
 バスに乗ること大仕事にしまだ務め 同  
 老妓のは同じウンでもしんみりし 同  
 税ム吏の気儘に飲ける店もなく 同  
 公営賭博妻子は福祉の世話になり 同

## 追悼の窓を

かすめるちぎれ雲

野村味平



金沢市で、発行されている北国新聞の柳壇、麻生路郎選に、毎月の発表ごとに、加賀市作見町の中松恒雄（一恒）と呼ぶ柳人の句が載っているのので、私は川雑大聖寺支部の句会に出席せられては如何かと通知を出したところ、早速出かけて見えたが、あれからざつと十カ年前以上にもなると思う。句会はいつも夜の催しであるのに、作見町から大聖寺まで五キロの道ではあるけれど、スクーターで応診カバンを肩にして、ほとんどこ忙しそうにして出席して来られた。急患の連絡の電話があれば、中座せられたが、雨や小雪の夜は、いたわりの言葉を付け加えるら、僕は大丈夫ですよと笑っておられた。色も浅黒い方で、小太り型であったから丈夫な方なんでしょうと、私なりの解釈をして置いた。ややもすると、沈退の方向にあった大聖寺支部の句会へ恒雄さんの登場は新風を吹き込んだようなものだった。この雨の中を、雪の中を柳魂があればこそと、私は、励ましの言葉を吐いたものだった。



農捨てたあつても保守になりかかり	同	みごもってから産まか産むまいか	同
本性違わず生酔い蹴躓き	日東里	金よりも無賃乗車のスリルにい	同
雨垂れの切れ目を汐に猪口を置き	同	夕焼けが子を呼ぶ母の声を染め	同
肩の線崩れ妥協の声になり	同	美人見ているでセメント軽いな	同
本当におこりますよと念を押し	同	純情か馬鹿か初恋まだ想い	杉原 愛鳩
輪に添えば団扇で誘う益踊	同	ストライクボールとテレビ鮑 <small>もも子</small>	同
白日夢蝶もつれ落ち舞い上り	同	ともかくも親がよろこぶ里がえり	同
矢張りと思う二人に旅で会い	同	時速八〇單車とばしている孤独	同
夫唱婦随ですわと女房舵を取り	同	現代っ子勘当ぐらいで驚かず	同
牛は牡嫁は女を産むさかさ	高知県 山川 勝子	新任地いきなり祭りにかり出され	同
倅は世の為になる子が育ち	同	コン泥のように飯院は子に隠れ	羽野野市 井上 圭太
さまつてる娘をお世話する	同	足組んで少女自由を主張する	同
サングラス夜道で逢ってドキッとし	同	芸術を成長株などと画商	同
一年生連れて看板読み歩き	同	久闊を酌めば寮歌が出る若さ	同
老夫婦耳遠くとも要が足り	同	悠々としんがりに乗る一区間	同
俄雨借る軒もなしビルの街	同	筆まめな奴に借りたが運のつき	同
シミーズが覗いてますとも云へず	同	空高き日を失職の靴がちび	兵庫県 常岡 孝風
玉のうな子を刑務所で産みおとし	鳥取県 鈴木村諷子	失職へ求人欄は安すぎる	同
コスモスよ俺とお前の秋になり	同	ピアノ弾く音失職の子をおもい	同
おそろしや金は要らぬという人の	同	馬鹿ゆえの孤独か山は厳とあり	同

が、五年以前から句会の出席も数少なくなつて行つたので、その訳を正して見ると、精神科をも始めることになつたので、毎日、午後からは、金沢大学の精神科へ通つているとのことだつた。

大聖寺へも応診に出て来られたので、街頭で会う機会もあつたが、いつも忙しそうで、スピードも出し過ぎていたのではないかと思わせる程だつた。そうしている内に、病棟を完成させたから、やがて句会にも出席が出来ると洩らしておられた。恒雄さんは、どちらかと言えば、寡黙の方ではあつたが、随筆を書かせば、なかなか旨味のあるものを書いた。

本年の一月二十三日の午后応診先から、自家用車に乗り込まれようとするところで出合つた。その時は、赤いセーターのお嬢さんが運転して居られたが、恒雄さんは、まだ入院の患者の数も少し、借金も出来ましてねと言つておられた。その翌々日、病棟は失火の為焼失して仕舞つたのだつた。五十四日以前には、

借金が出来て嬉しい年送り

恒雄

こんな年賀状を頂いて居るのに、それから營々として、再建に務められて居つたのであるが、去る九月二十六日午前六時、今、新しく建設せられる病棟の基礎工事だけを完成させて、心筋コウソクで急



孤独今日金につながる愛歎く	同	冷蔵庫冷えるまもない夏休み <small>高槻市</small>	撫本 枝蝶
茄子漬の艶忘却がよみがえる	同	義理の娘のしくさわたしに似 <small>さいら</small>	同
百姓に貯金はさせぬ近代化 <small>青森県</small>	岩淵 一星	もの忘れするも暑さのせいにして	同
✓ 恩師だけ処女でクラス会困り	同	へそくりがあるような顔で株式欄	同
腹立てた色で督促状が来る	同	老眼をかけなさいとはいやな医者	同
気象庁の見込みはづれた稲の出来	同	義兄急逝す	同
婦人会どもと同権とは悲し	同	鐘の音を黄泉までとどく <small>うら</small> に打ち	同
しくずりを歯医者削って間に合せ	同	発車ベル命あずけた光号 <small>大阪市</small>	山田 李鳥
わが日日を中盤として駒鳴らす <small>京都市</small>	大久保 <small>和泉三郎</small>	伝言板ニツクネームで書いておき	同
とんとんものが壁ぎわまで運び	同	ビジネスの声で和尚は経上げる	同
賠償金人のいのちに値を填める	同	先輩は月給だけの汗を出し	同
曼珠沙華お地藏さんは寝てござる	同	実印と印紙で紙はものを言う	同
朝の茶を沸す夫に仕上げられ	同	一肌をぬぐ友情は利を云わず <small>見島市</small>	伊丹柳瓢子
嫁の荷の喪服よ誰に何処で着る	同	ほしくない晩酌妻の気をもませ	同
再建の本堂大工が昼寝する <small>奈良市</small>	村上 春巳	背の子をあやして続く立話	同
船着いたのを奈良でも感じさせ	同	ニツ三ツ内緒事あり姉女房	同
ワンダフルぐらいは鹿ももう覚え	同	満月へ話題のつきた土手の声	同
俺の子と鹿とを外人モデルにし	同	筆まめな友に手紙の借りが出来 <small>羽曳野市</small>	河本 雪男
セロテープはっお札は羽根が生え	同	七夕に別離もあるを子に云うな	同
完全犯罪テレビが新手また教え	同	どうにでも染りましウエディング <small>ドレス</small>	同

逝された。行年五十才、金大の週二回の通学、応診から回診、自動車の免許試験を取るための練習、などと過労が祟ったのだと思う。新聞の死亡広告を見ると、告別式は、午後二時となつてはいたが、丁度この日は、日曜日でもあったが、私は、折悪く身体の具合が悪くて臥つていたので、遺憾にも参列することは出来なかつた。

### 現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号  
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月
- (277) 柳 沢 花 泪  
 (一) 柳沢栄一 (二) 花泪 (三) — (四) 伊勢崎市本町二丁目 (五) 大正四年二月二十四日 (六) 伊勢崎市本町二丁目 (七) — (八) — (九) たしなめる段に五郎の声が生き (一〇) 詩文芸・民俗学 (一一) 有 (一二) 昭和四・五年頃
- (278) 田 中 蛙 眠 子  
 (一) 田中茂 (二) 蛙眠子 (三) — (四) 鳥取県西伯郡西伯町原一四八 (五) 大正十四年十二月二十二日 (六) 現住所と同じ (七)



趣味というエゴに松まで歪められ	同	夏を閉ずタンスの一番下に閉ず	同
全快し又わがままな父となり	同	汁鍋の破れにも拝観料とかや	新豊浜市 安藤 桂仙
戒名は赤字で添うて廿年	高知市 須藤 俊江	吾が蠅も追えぬに人の世話を焼き	同
この松庵の棺桶用の分	同	老いてなお火中の栗が拾いたく	同
お月見の販りもネオンの下に来る	同	大根を並べ夜蜘蛛は紅を引く	同
賞品の毛布も親に売りつける	同	舞扇宿命しかと受けとめる	香川県 三井 酔夢
大きいママと云はさ姑派手に出る	同	家族みな五輪切手の列に居り	同
釘付の中で台風の一夜明け	玉野市 小谷 仙山	うるさいと思春期母をよせつけず	同
石垣を影はいのぼる待ぼうけ	同	才媛の妻をめとりし悔続き	同
い、ねぎが有ったと肉も買つて来る	同	ポナスへ妻の予約がまたずれる	玉島市 水粉 千翁
記者団へ肩で息する新記録	同	一泊へ二食持ち込む木賃宿	同
何日くれる当てのない金待つ落目	同	エプロンの端を丸めてもらい泣き	同
盗塁のように夜を抜けいでて	パオアルト 斉藤 流路	蚊を叩く意欲もなく意見聞く	同
週末の湖オールのココができ	同	水着かと思う姿で街をゆく	青山市 青山慶之助
脚線美 上半身はウバ桜	同	まだ値切る母を他人のように見る	同
アロエも下火になったまゝに伸び	同	鳴くまでは待てん信長俺もそや	同
新聞が遅れて不味い朝を食べ	同	幸運の連続あとが恐くなり	同
虫籠に最後の勝者も死んでいた	羽曳野市 古川 静波	精農の窓に夜明けの灯がともり	玉島市 井上 旭峯
午前二時虫が鳴いてる虫の恋	同	ポチ袋集めた孫の貯金帳	同
午前二時もう新妻もあきらめる	同	知事賞を夢見て咲いた菊でなし	同

地方公務員(八)西伯(四)(九)雲足の速さ美笑屈たそがれる(一)〇〇(囲碁・スポーツ)(一)有(二)昭和二十六年十一月

(279) 藏多李溪

(一)藏多馨(二)李溪(三)一(四)東京都杉並区荻窪二の一四三(五)明治四十三年八月三十一日(六)鳥取市西品治七〇(七)団体役員(八)392二五八六(九)病める妻洗濯日和などという(一〇)囲碁・釣(一一)有(一二)昭和六年春

(280) 清水望峰

(一)清水敏男(二)望峰(三)一(四)大阪市生野区南生野町四丁目五二(五)大正十四年九月二日(六)京都市左京区田中樋の

**味の七-コ**

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻 東へ

**御門**

TEL (四) 6684

御集会には階上を御利用下さい



直会に酔うた日もある神仕え	同	鍵ッ子へ今日も淋しい告知板	同
暑いとも云えずナースの端正な	大阪市 半田 夏生	雑音へ叩かれている古ラジオ	同
生駒山浪速は星を播いたよう	同	此の夏もとうとう帽子買わぬ意地	大阪市 西本 保夫
入墨に昔を見せて老を病み	同	仰向けに書く万年筆は病んでいる	同
光陰は原爆の子が聖火持つ	羽曳野市 谷 一征	要領を本分として元軍人	同
ハンドルを持ってば信号多くなり	同	蟻のごとスカイラインに続くバス	同
旧姓で呼ばれる妻は未だ若し	同	パパと行くママがうれしそう	同
オリンピック飯れ飯れと友が呼び	ハワイ 上田 紅溪	ねむる子にカメラ弁当持てあまし	同
日本語の受話器へ孫はナンバー	同	よく文句言ってた頃は働いた	福生市 渡辺伊津志
無くて泣き余りや尚泣く水日本	同	住宅にバスして出世諦める	同
六十の頑固張らせぬサロンパス	岡山県 永宗 宗義	元少尉だけの前歴言いたがり	同
赤旗で取ってホルモン屋で取られ	同	五つ月と言う腹で夢多し	鳥取市 岩田八文銭
ボス入院婦長おかし程あわて	同	雀の子遊ぼう等と言とれず	同
折詰の中味婚礼評価され	金沢市 根上 杏花	合槌を打てば打つとて叱られる	同
梅干で母の安否をフト思い	同	よれくの札は浪費にはたき出し	神戸市 吉田 隆史
表札も名刺を張って遠慮勝ち	同	金持のケチを得心した旅行	同
初盆を二つ迎えて淋しがり	兵庫県 斉藤たけお	瓦斯風呂の完成雑誌焼却す	同
鉄道に勤め東京も知らずすみ	同	聖火の通る道にぼつんと犬の糞	鳥取市 近藤 秋星
手まわしと代書屋に始末書頼んどき	同	運動会のピリも父似にされている	同
ラツシユアワー恋し里住まい	和歌山県 山本定男	金のない時を狙ったように死に	同

口町六三(七)仕上工(八) —  
 (九) 御堂筋巾見なをしている夜  
 明け(一〇) 釣・閉基(一一) 有  
 (一二) 昭和二十八年三月

(281) 大谷 月都

(一) 大谷久能(二) 月都(三)  
 (四) 大阪市旭区上辻町四五

番地(五) 大正十四年十月二十日  
 (六) 舞鶴市(七) 会社役員(八)

(481) 八八四七九(九) 道とえば嫁  
 にも欲しい教えよう(一〇) 釣り  
 (一一) 有(一二) 昭和二十年十月

(282) 林 葵 丘

(一) 林建成(二) 葵丘(三) 釣り  
 魚庵(四) 岡山市上伊福八三六の

二電々公社上伊福アパート一号  
 (五) 大正八年十月五日(六) 岡

山市駅前町二丁目四五(七) 電々  
 公社社員(八) (五二) 三三三二七

(九) 電報へ庖丁もったまま出て  
 き(一〇) 日本画・釣(一一) 有

(一二) 昭和三十年夏

(283) 高野 不二

(一) 高野藤右五門(二) 不二  
 (三) むじな(四) 新潟県佐渡郡



会長はうなずくだけの人でよし 七尾市 松高 秀峰  
 片腕とおだてて使うこつも知り 同  
 味の店女と酒の店らしい 同  
 むかつ腹ビールで冷やす腹の虫 八代市 永松 道雄  
 山小屋で二日三晩の雨宿り 同  
 空前の稲作案 山子弓を持ち 山梨県 赤池 五朗  
 こりごりへ又申し込むバス旅行 同  
 子等まねる聖火リレーに赤トンボ 笠岡市 谷本鈍愚坊  
 年令なのかハッスル総身とまりかね 同  
 オリンピア、聖火に平和の色を見る 八戸市 川村 映輝  
 派手な衣裳心の貧しさのぞかれる 同  
 ご用聞き夫婦喧嘩に巻き込まれ 課早市 大崎 筆染  
 広告の毛生葉を買いあさる 同  
 水害地水筒持参奉仕隊 島根県 星野 侑正  
 ステテコの誰はばからん二号宅 同  
 まだ蠅がいるわと背中叩かれる 大坂市 中川 滋雀  
 簾ではブライバシーの夜がすけ 同  
 農繁期人の手もなし猫の手も 羽咋市 三宅 ろ亭  
 秋はよし果物うまし酒うまし 同  
 腰曲る丈け曲らせてよく動き 河内長野市 森本黒天子

空の旅孫が一足先へ乗り 同  
 隆鼻術扱った金ほど高からず 大坂市 和田 痴亭  
 下請を泣かせて立志伝を書き 同  
 稲の出来ほめて貸切バス無事故 大坂市 藤富 淀月  
 母一人カルピスお湯にしてみらい 同  
 犠牲つげ涙の訓示する教師 京都府 西村句楽坊  
 学校も五輪音頭で運動会 同  
 病床の夜景ネオンがなつかしく 羽島野市 松川 凡太  
 かけ足で去った病床の青春 同  
 嫉妬心小出しに出して梶を取り 富田林市 岩田 美代  
 通ぶって美術の秋になやまされ 同  
 楽しんだはお互い様と別れける 神戸市 大野木真砂  
 角かくし身はバアジンに有りも 同  
 ごきぶりとなめくじ夜半から天下 茨木市 高木繁太郎  
 病院も蛍の光で別れつげ 羽島野市 井谷みつお  
 夕刊が配達されて腰を上げ 藤市 和泉 松風  
 悲恋さえ十年経てば懐かしく 愛媛県 澄本 満子  
 聖火来る街は祭りのような人 松江市 岡崎 祥月  
 故郷の話が咲いた盆列車 兵庫県 柿坂 昌子

畑野町目黒町(五)昭和五年三月  
 二十一日(六)現住所に同じ(七)  
 地方公務員(八)畑野局二七一  
 (九)野球嫌いがいるのをテレビ  
 知らんのか(一〇)落語・奇術  
 (一一)有(一二)昭和二十八年  
 七月

(284) 仲川たけし

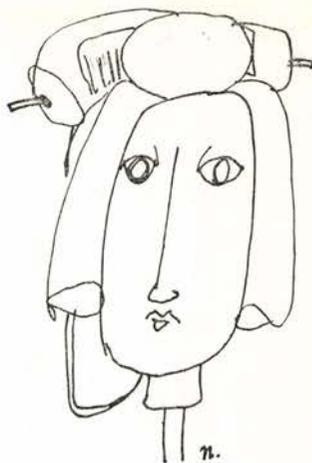
(一) 仲川幸男(二) たけし(三)  
 (四) 松山市湊町五丁目  
 (五) 大正五年九月十五日(六)  
 愛媛県伊豫郡(七) 県会議員・社  
 長(八) (2)七三九七・(3)〇六一一  
 (九) 立志伝母鬼となり彌陀とな  
 り(一〇) スキー・登山・随想・  
 マージャン(一一) 有(一二) 昭  
 和十六年八月

福壽司

心斎橋筋大丸前  
 電話 〇三三四番

## 妻を語る (上)

到着順——



① 先礼ですが、  
あなたの奥さんは  
どんな方？  
「叱られない範囲で  
お話しください」  
② あなたの奥さんを  
モデルして描かれたと  
思われる句をお示し下  
さい。

— アンケート —

## 良妻賢母型

川村 好郎

いい妻よノートちぎった文なれど  
子供等が待っていますと妻の文  
十年程前私が社用で東京へ月の  
うち殆ど家をあげ、出張ししかも  
約八年程つづいた時分に、東京で  
作句したもので、私の妻はこんな  
妻であった。そして今でもこんな  
妻である。

言うならば明治型、少しはめ過ぎ  
ると良妻賢母型、夫唱婦随型で  
ある。明け暮れ洗濯し掃除をしエ  
ブロン着け通して家の中でパタパ  
タして、結構達者で満足してい

川柳の方は未だ一句も作ったこ  
とがない。そのくせ佳い句はわか  
るし、仲々きびしい選者であり批  
評家である。

私は沢山な人の中で話をした  
り、司会や媒酌や葬儀委員長をし  
たりする事を別に嬉しがっている  
わけではないが別に苦にならない  
むしろ張り切って引き受ける方  
であるが、女房は人の前に出ること  
が至って嫌いである。已むを得ず  
出席せねばならん時は、まだ決っ  
てない数日前からそれを気にして  
肩が凝って来て気分が悪くなるの  
である。

大阪しか知らずに妻は老けてゆ  
き  
やっと連れだした妻の目に青葉

「今度の句会に投句しようと思う  
がどうだろうか」と快心の作のつ  
もりで見せると、ジツト見て、  
「まあまあだんな、先生の選なら  
一句も抜けんナ」と、  
「この中でどれが良いか」  
「どれもこれも同じようなもの  
で、余りええのはいない。やっぱり  
川柳は文夫さん(梅里)の方がズ  
ット上手だ」  
といった調子だ。たまに私が天  
位を貰って帰ると、  
「古い人や、上手な人が出席され  
てなかったのでしょうか」  
それでも私が今日も川柳、明日  
も句会という、決して止めもし  
ないし感心していて内心喜んでい  
るし安心している。

路郎先生の句に  
今もし女房に死なれたらと思  
い、この句があるが、しみじみそ  
れをほんとはと思う齢になった。  
女房に死なれたら或はもの好きな  
若い人が来てくれるかも知れな  
い。しかし貧乏世帯のやりくりが  
まかせられるだろうか、内をまかせて  
働けるだろうか。

しわ増えてきたがかけがえない  
女房

私も鏡にうつすのものはづかしい  
程老境に入ってきたが、これでも  
「紅顔の美少年」の時代があつて  
惚れてくれた人もあつたが、こう  
なったらゼニが無かったら誰も相  
手にしてくれない。そのゼニが無

い。結局ゼニの要らぬ女房と遊び  
にゆくより仕方ないし、かけが  
えない女房の老後をいたわつてや  
るのがこれからの務めと思つてい  
る。

新歌舞伎座妻の小じわがよう目  
立ち

有馬温泉  
老けたなと思ひ妻の肩流し

この原稿をやはり妻に読ませて  
許可を受けたら、自分のええこと  
ばかり書いてと叱られた。

## 妻を描かず

山路 閑古

先日ある句会に招かれ、短冊の  
揮毫を乞われたので、望まれるま  
まに俳句二句、川柳一句を認め  
た。その川柳は、  
恐妻の虫も殺さぬ抜衣紋

閑古

というのであった。妻の友人が  
それを見て、妻の肩を叩き、  
「へんなこと書いてるわよ」  
といった。

「運うのよ。あれは阿部真之助さ  
んの奥さんのことよ」  
と妻はこともなげに弁解した。

妻がどう解釈しようとする自由だ

が、作者の私は自分の妻を描いた  
積りであった。自分も恐妻家の一  
人だと思つているのである。死ん  
だ阿部氏とは何の交渉もなかつた  
が、どの程度の恐妻家であつたも  
のか。氏の死後一億という、普通

の新聞記者などでは思いも寄らぬ  
巨額の遺産が蓄積されており、そ  
れを惜しげもなく育英事業に寄附  
してしまふなど、皆これ恐妻の仕  
業であろう。相当の女丈夫を氏は  
抱いていたことが想像される。恐  
れざらんとするも豈恐れざるを得  
べけんや。

私の妻はさほどではない。そう  
いうことのないように、結婚当初  
に充分に入選をした。なるべく小  
柄な、髻も小さく、肩も痩せ細っ  
て、同衾しても窮屈でないよう  
な、よくいえば春信型美人、悪く  
いえば肺病でも出そうな劣等体格  
型の婦人を選んだのであった。そ  
れでも結婚三十年を経過すると、  
三界に家のない奴も根が生える。

一方には鼻毛も尻毛も読まれるよ  
うなヘマの繰り返しがあつて、だ  
んだんに恐妻化して来るのであつ  
た。

私は今は随筆などに妻を書くこ  
とは殆どない。初期の頃はまだ珍  
しかったので、縦から眺め横か  
ら眺めして、妻を描き、随筆集の  
半分はそれであつた。それを阪井  
久良俊氏が読まれて、  
「あんまり女房のことを書くんじ  
やないよ。漫才みたいでおかし  
いから」

と苦情を持たれた。その頃夫  
婦漫才の掛け合いということが流  
行して、高座や舞台で亭主の頭を  
細君が扇子で張つたりするような  
仕草が喜ばれた。しかし本当の夫  
婦が漫才に出演することは許可さ

れなかった。本当の夫婦でそういうことをするのは、社会風教上よくないと考えられたのであろう。私の隨筆にも多少その傾向があり、それを久良伎氏に指摘されたのであった。

それで恐縮して、その後は妻のことは殆ど書かない。

## 大の字に寝る妻

西川 晃

次女が通っている中学のPTA新聞を一手に引受けて編集しているので目下極めて多忙。日頃の広言の手前もあり、いささかの依氣も手伝って引くに引かれぬ状態になり、孤軍奮闘中、御蔭で川柳はつくれないが、路郎先生の御苦勞はよく分った。

さて賢妻のこと……

死ぬ程の恋がしたいと妻言えり  
魔性ちらと見せたる妻の薄化粧  
霞乃先生、阿茶女史の系統に属  
するのであろう。いつになっても

女学生気質が抜けない。太い脚で低い天井をつき上げるように、美容体操とやらをやるかと思うと、「いっぺん死ぬような恋がしてみたいなあ」などと亭主の存在を無

視した暴言を吐く。外出するときには「どこかに素晴らしい恋でも落ちていないものか」と期待に胸をふくらませているようにいそいそと出かけていく。

母の会 わいの女房が会長や

偉い妻もって 交際費が嵩み

ろくに原稿も作らずに、いきなり数百の聴衆を前にして演説をぶつぐらいの黄度胸がある上に、いくら小才が利くものだからPTA

Aだとか婦人会の役員に引っぱりだこである。「おとうちゃん。済んまへんなあ。ちょっと、いてきます」と口では済まなさそうにい

うが、その爽平気で、いそがしい商売を私に押しつけておいて「皆んのために」とやらへ出かける。

お人好しで、あけっぴろげだから、男性にも女性にも人気があ

る。御蔭で——幸か不幸か——私まで彼女の亭主であることと、よく禿げていることで、此の地区の

有名人の一人になってきた。

ころっと俺が死んだらと妻を嫌

がらす

楽天家で、オッチョコチョイで、お人好し。こんな妻の行動をみてみると、「もし私が死んだらどうしてやっていくだろうか」と不安に

なってくる。

「その時はその時で、何とかするわよ」と平気を装っているが、内心ドキリとして「亭主も少しいたわらねば」と考えるようである。

「明日のことを思いわずらうな」というキリスト様のおことばからすると、苦勞性の私より彼女の方が、神に近い存在なのであろう。

大の字に寝る妻にして貧に耐え妻はよく不眠に悩まされるが、昔の豪傑のように大の字にな

って眠る。かつての私が理想とした女性とは程遠い妻の寝姿だが、

そのような妻だからこそ、裸一つで支那から引き揚げて来た私と貧乏を共にして、少しもくじけず、

健気に生きてこられたのである。考えてみると、いじらしい。

日蝕の如く忙しや妻が(病)悶る

## 思慮分別がある

後藤 梅 志

恋人になつたら死ぬるまで一緒

梅 志

私の句からこんな句を見つけた人があれば、何を言っているのか一寸分らないだろう。

これは私と妻の間の気持ちを、

最も単的に言い表わしたもので、つまり「死ぬる時も一緒に死のうや」というわけで、それが幸にも

四十七、八年続いている。こんなことは阿呆らしくして説明の限りでもないが、愚妻との間は極めて仲

がよい。私は元米生れ付きの野人で、怒りっぽく短気だが、妻即ち

女房の方は思慮分別があり、私がおとなしい時は思い切つて金も遣うし我儘もいうが、私の気が荒っ

ぼくなると、如何なる場合でも私が角を折るよう仕向ける。私は有

為転変のはげしい方で随分色々な境遇を経て来たが、妻と一緒に居る限り一種の吉瑞を覚えるのである。ところがその女房は、世話の

焼ける点ではこの上無しなのである。

結婚したのは私は二十六、妻は二十二才だが、恋愛時代が三年程続いた。上流の家庭で育つて世の中

の波風には当たらず、東京の女学校時代の友達も深窓に育つた人ばかりと見え、「梅毒りん病」とは

どんなものか新聞を見ても分らず、質問されたのには驚いた。第一或る易者から、子供の時分、お嬢さんは実に恵まれた月日の下

に生れ(妻は一月一日生れ)生涯

悪疫や危難にも会わず、この上な

したが子宝に恵まれません。と言われたとかで、結婚する資格がないと独りで極め込み、結婚に同意

しなかったものである。信じて少しも疑わないというのも困った

ものである。今では一男四女の女親であるもおかしな話。銭勘定は分らないし、今でも切符を一人で買ったことがなく、途中ではぐ

れると迷児になることはいけ合いです。

母の下駄ゆがまぬなりに古び居

り

梅 志

これは依りに母という文字を使つたが、妻の下駄なのであつて、妻では工合が悪いので母としたのも

の。北区の或るビルディングに売店を持って通い出してから十六年になるが、朝の出勤は必ず五時廿分、必ず地下鉄の同じ電車に乗り、座る場所もきままっているのである。そんな工合で、新規の仕事先を私が極めてきても不都合のない限りは絶対に取引先を変えない。だから商人も、奥さんの呉れるものは間違いないと、目の前で金の勘定はしないそうだ。

ものを言うと怒る大工で任せ

とき 梅志  
という句があるが、半分は妻のことだ。

張り板のように腐らぬ故もあり 梅志  
これもモデルは亡くなった母親と、妻の姿がそのまま目に泛んでの句。

不細工な妻に子供はようなつき 梅志  
こんな短冊を店の中へ掛けておいたところ、お客の一人が「おぼさんこんなことを言われてよくだまってる居るね」と言ったが、「不細工でなくちゃ川柳にならないんだよ」と、やり返して少しも苦にしない様子がない。矢張り川柳家の妻だけのことはあると、私も安心した。

### 恋愛結婚の妻

#### 直原 七面山

恋愛結婚をしてすでに二十一年、幸い倦怠期と言った時期とでもなく、無事二人三脚のレースを七合目位まで進めることが出来た。

その二十一年間に喧嘩で妻の頬をぶったことがたった一回。あれは確か終戦の年であった。なにかと世の中が住みにくく騒々しかった故でもあったのであろ

うか。 梅志  
連れ立って旅らしい旅をしたことが三回。それはとても愉快であった。

頭脳明せきとまでは言えぬが体の方は至って強健で病氣らしい病氣は一度もしたことが無く、専ら病氣がちな私の看病を良くしてくれた。

それが自分で勉強して保母の資格を取り、頼まれて町の保育園に勤めるようになって九年目の春、病勞が重なって遂々高血圧で倒れてしまった。

それ以来保母も止め、川柳を作ることも止めてしまい、今では一人娘の教育と手内職に専ら精を出している。

お蔭で僕は余暇を全部川柳に当てる事が出来てもいいのだが、時々思い出したように、作句をしてみてはどうかと本気で進めてみるのだが、どうもその気になれぬらしい。

が、もともと好きな川柳のことなのだから、その中にまた、作句してみよう気にもなるだろうと、このところ無理強いはいさけています。

さて、妻をモデルにした句であるが、長い期間のことでもあるのかかなりな数にのぼるのではないかと思っていたのだが、川柳塔を繰ってみて案外その数の少ないのに驚いた。

らしいのは除外して、はつきりそれと判るのを拾い上げてみたのだが、それでも二十一句になっ

た。妻が知ったら驚くだろう。

× ×

長男は本の通りに育てられ  
時計より確かな妻が目を覚まし  
愛妻の天気予報へ傘を提げ

湯上りの素肌夫の目を避けず  
湯上りの妻と握手も旅のこと  
女房の欲の深さにフトあわて

時々には緋の寝巻でも着て見せろ  
時々はおぶってもらいし妻  
ぶんなぐる愛情なんてあります

の  
ホータル来いホータル来いと妻  
若し

値切るのが得意の妻を連れて淋しき

× ×  
藪医者を最敬礼で送り出し  
四十五もう夫へは化粧せず

元旦の計へ女房がケチをつけ  
古い浮気を妻は時刻にしてくれず  
近きし児の墓石の雪を払うてみ

病床の妻に握手を求められ  
同じ程飲んで女房知らぬ顔  
澄し切って甘えぬ妻に気がかり

たよりにしてまっせと保母が圍  
兄にからかわれ  
女細やか羽織の紐の柄までも

### 大きな声

#### 野村 味平

一入強い、里配りの言葉で雑談が出来る相手があると、とっても機嫌のよい女房で、身体の弱い割には大きな声を発生させて、私を、びっくりさせます。

テレビの#さんりさんを聴かせると、出場人物以上の早さで、ずばりで、私を、あきれさせておられます。

#### 味平

ハタキャンの在処を探す女房にて

### 詠 近 舟 同

#### 須坂市 高峯 柳 児

獨身寮しおれた花瓶へ振り向かず  
扶助料をとれと相談欄教え

#### 和歌山市 秋月 宏方

留吉もとめ子も生んでまた孕み  
働蜂僕にいちばん合うことは  
着屋の足は長靴はきたがり

#### 大州市 米沢 暁明

すれすれに来ても社長は迎えられ  
楽屋では赤字補填の思案中

これほど走る聖火が来るとここに住み  
横綱のどう撮られてもよい構え

#### 今治市 長野 文庫

スペイン語らしいと一人二人散り  
老記者か呉越と書いた選手村

#### オリピックバタ臭くなる東京都 選手出た村で残らずテレビ買う

設備まだカラーテレビが間に合わず  
今治市 月原 宵明

分譲地のコスモス野生花してしま  
ぎすの巢の家から牢獄のようなビル  
姐さんの襟脚赤い鳥居越す

#### おろがむに非ず社頭にカメラ向け

渾き水枯れたまんまの元県社  
苦笑しながら退職金を計算し  
下積の吊皮で読む朝刊紙

#### 名古屋市 長谷川 鮮山

仲良しの暗号めいた返事する  
金の使いかたを親方から習い



# 五世川柳 その句 (三)

阿達義雄

## (一) 佃の詠史吟

「柳多留」に見える佃の詠史吟は五百句に近い数に達している。この様に詠史吟の多かったことは、彼が後に著わした「英雄百人一首」「義烈百人一首」「秀雅百人一首」等において、多くの史上の人物の歌と事跡を解説していることと思ひ合わせてみると頷かれる節もあり、これらの書の序や内容から推してみても、彼は和歌や狂句を以て、民衆や幼童婦女の教化手段と考へていた様である。

右のことを念頭に佃の詠史吟の傾向を検討してみたいと思うが、彼の詠史吟の悉くに當ててみるという事は容易ではなく、又、その必要もないと思うので、主観的選択を避けるため、次の基準によって句数を絞ると共に、その基準に當て篩まる句だけは悉く網羅して、佃の好んで採り上げた素材と狙いについて考へてみることにする。それには、第一に地理的な観点から、佃の句の中から東北地方(陸奥・出羽)に關す

るものだけを悉く拾って、どの様な句があるかを調べてみることであり、第二には、史的伝統的性格の結晶とも考へられる紋章吟として、如何なるものが、どの様な狙いで以って詠まれていたかを検じてみることである。

(一) 東北地方に取材した句  
先ず、「万葉集」巻十六にある陸奥国安積郡の前采女の歌「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが想はなくに」に基づいて作った句として次の三句がある。

○敷島で其名は高き浅香山 (七二・4)

○夷賊には道の分らぬ浅香山 (八四・20)

○山の井を汲み分けたのも深い知恵 (九一・16)

右は要するに和歌や和歌の心を知る者を称えた句であつて、葛城王や前采女を風刺したり、滑稽化している様な処は少しも見られない。

なお、この点は、次の宮城郡多賀城村の

壺の碑と塩釜を詠んだ句にあつても同様で、

○壺と竈名高い奥の名所也 (七二・1)

即ち、壺と竈との縁語を狙つただけである。

次に、前九年の役関係のものに、源義家が安倍貞任を衣川に追い結めた時、義家が「衣のたては綻びにけり」と言いかけたのに対し、貞任が「年を経し糸の乱れくるしさに」と応じた話に立脚した句として、

○はころびの歌で縫ふべき矢をはづし (七五・41)

○ふせぐ矢も尽きて一首を縫ぎ合せ (一六二・8)

右の二句が見え、甲句の「綻び」は「縫ふ」の縁語になつていただけの句で、この史話をそのまま、詠んでいるに過ぎない。

参考迄に、佃の著「英雄百首」の中に記されてある貞任の解説をみると、

「ころも川の城守手きびしく攻立しかハ終

に落城におよび貞任せひなくおちゆく所に義家弓に矢をつがひてまちかへせより  
へころものたてハはころびにけり  
とのたまひければ貞任馬のさんずをひきかへしとりかへず

へとしをへし糸の乱れのふるしさにト  
かゝるあやうきばしよにてかくつけたるやさしき心をかんじ義家つがいたる矢をはづしひきかへしたまひけり

世にくるしさにといひつたへたれど糸にくるしきのえんなしふるしきなり云々」

右の様に「糸の乱れの苦しさに」を「古しさに」と訂正するなど、佃の縁語癖を語るものであらう。

なお、源頼義のために捕えられた宗任が都に引かれ、公家連から梅の花を示されて、「これは何か」と嘲笑的に聞かれた時、「我が国の梅の花とは見つれども大宮人は如何いふらむ」と答えてやり返した伝説を詠んだ句に、

○宗に任せて良吟は梅の歌 (一一二・7)

○梅花だと言ふと油をとるつもり (一二七・90)

二句共掛詞利用の句であり、梅花は江戸時代の髪油の名でこれに掛けたのである。

又、前九年後三年で十二年になるので、

○十二支の皆出払つた御凱陣 (七八・3)

○あきれた軍九年目に中休 (一二六・51)

○諸事前の通りと触れる後三年 (一六二・14)

○松島を景と気が付き御凱陣

などの句が詠まれており、もし、前九年後三年の十二年がそれぞれ度十二支に当てたら、知的な穿ちとして一興もあらうが、ただ十二年間であるから、「十二支の皆出払つた」としたに過ぎない。一見すると、妙な所に気がついたものと思うが、調べてみると当てずっぽうであることが分かる。

○十三年目で松島へ行脚来る

(一四二・32)

右の句もこの頃に属する句ではあるまいか。然うでないにせよ、東北地方に入るべき句である。

陸奥の俗習の錦木は川柳点では、仙台高尾に關係して多く詠まれていることは、既に拙著「川柳江戸花街風俗」で述べた処である。これは詞花集にも「思ひかね今日立てをむる錦木の千束も待たて逢ふよしもがな」とあるくらいであるから佃も、  
○恋に名の立つは錦木加田の權  
(一二二・35)

○い、娘錦木門に置きあまり

(一三四・34)

と詠んでいるもの、夫が不在の時、漁師の妻が片商売に自宅で私娼的行為をやリ、軒先に權を立て、「商売中」の合図として、帰宅した場合の夫をして這入ることを遠慮させたという紀州海草郡加太の俗習の權立と錦木を對比させているが、この両奇習を対照させた外に別に句としての面白味はなさそうである。佃と同時代の吟者の登志丸の句には、  
權立て、祭りをわたす加田の浦

(一〇〇・124)  
という句があり、掛詞利用の破礼句とはいえ、とにかく、權立(加太の私娼)の属性面を可笑化している。

次に、奥州伊達郡葛原で入寂した権大僧都覚英が庵の前の松に刻んだ辞世「世の中の人には萬の松原と言はる、身こそ嬉しかりけれ」の歌に因んだ句として、  
○覚英の辞世は松へにじむなり  
(七八・27)

というのが発見される。

又、「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」の一首で有名な能因法師も川柳点では好題目となっており、佃もこれは關係させて、  
○能因が窓へ出ぬ日は田がしめり  
(七九・4)

○能因も顔を取り込む俄雨

(八七・9)

○能因が窓も建てける横時雨

(一四五・4)

という風に専ら雨天の時の能因の想像吟を物しているが、唯一句の例外として、  
○破れふんどし能因が窓のやう  
(一三八・32)

右の様なのが見え、これはふんどしの破れ目からかの物が頭を出すことを能因が窓からその頭だけを出しているのに見立てようとしたもので、天保的な破礼句といえよう。

伊達騒動の舞台は仙台よりも江戸の方が賑やかであるが、これらに關する句も一応奥羽關係のものとして考えると、既に遊里吟の中に掲げた佃の句には、

○大守のむつごと華魁に上ぐずまれ  
(九七・25)  
○民のかまどを句はせる御放袴  
(一〇二・35)

右の二句が見え、その他に、伊達騒動の中心人物たる原田甲斐や綱宗侯に落籍されたと伝えられている薄雲大夫を詠んだ句が見え、  
○あぶり出しなどで原田が書状箱  
(一一九・25)

○しのぶ摺り薄雲に又乱れそめ  
(一四五・23)

右の「しのぶ摺り」は綱宗侯を指し、この句は、河原左大臣の「みちのくの信夫文字摺り誰ゆゑに乱れんと思ふ我ならなくに」の歌を綴って利用したものであろう。

次に、仙台藩の辻番が、赤穂浪士の引揚げの際これを一旦喰い止め、粥の接待をしたという。  
○塩を入れ仙台米の粥を出し  
(一二二・34)

右の一句も佃の作で、「塩」によって赤穂(浪士)關係の句であることを暗示している。なお、前に掲げた「大守のむつごと」の陸事は陸奥にも掛けたものと考えてよからう。

最後に残ったのは、秋田の大露の句であるが、これには、佐竹侯が殿中に於て諸侯に自領の大露の自慢をしたもの、これを否定され愚弄されたのを怒って、国許から大露を取り寄せて諸侯に饗し腹癒せをしたという話に基づいて作られたものと思われる。即ち、  
○論の大露きり合ひが出来る処。

(九三・33)  
○平は露皿へははたの魚を盛り  
(七三・14)

(二) 佃の紋章吟

奥羽地方に關係ある句を検討してみても気付いたことは、佃が教化の手段と考えたらしい句には徹底的な句が多いことである。即ち、それ等は川柳点の立場から見ても、柳味がなく、狂句として眺めてみても狂態という程のものではない。

この傾向は佃の高番句や道句を見ると、一層顕著になっており、これ等にあつて奇警を弄したり、裏面を衝くという様なことは佃の生真面目な性格が妨げていたのではあるまいか。

換言すれば、彼には道義的なものや権威的なものを客観化して、諷刺することや愚弄し茶化することが苦手であつた様である。このことは、彼の紋章句に於ても之をみる事が出来る。

佃の紋章吟は十二句ばかりあるが、その中でも、形原松平の利文字の紋の句だけが三句あり、これ等の句は、狂態的表现をとるに至らなかつた。

天正十二年三月、秀吉が織田信雄と戦を開いた時、家康は信雄を援けて、秀吉の軍勢と長湫において戦い、奇兵を以て豊臣方の池田・森等の陣を襲い、遂に秀吉をして和を購せしめた、この戦において、形原(松平)氏の祖は、「利則是」と書いた旗をもつて奮戦し、その名を大いに挙げたので、この勝利を記念して、その家紋に「丸に利文字」を用いる様になつたと言われて

いる。  
この紋は田の中に「利」という字を記したものであって、佃はこの紋について、

○はまれさは利運の一字紋につけ

(九六・26)

○利に二つないは普れの御紋也

(一三八・7)

○御忠節末世利を得た形原

(一六一・8)

右の様な句を吟じているが、「利(理)に二つない」に多少の洒落が見られるにせよ、これは狂態的な表現というよりは寧ろ利文字紋が二つない普れの紋であることを強調している感が強い。

余り有名でもない利文字紋の句を三つも詠んでいる処を見ると余程感心して作ったのであろうが、その様なことをその様に詠み出したというだけで何の奇もなく可笑味もない句になっている。第一に「普れ」だとか、「御紋」だとか「御忠節」という様な句ばかりであることが狂句としては特殊であり、殊更に「紋につけ」「御紋也」という様に「紋」の字を詠み込んでいるのは右の二句の外に、

○武の神額梶原や千葉の紋

(一五五・24)

というのが見え、これも言外の面白味が少しもない句である。

更に、忠臣蔵の鷹に対しさえも其筋に敬意を余すの余り、

○請取りに鷹とり啼い、地名

(九五・20)

と讃辞らしい口吻を露呈しているのが見られる。

要するに、佃の句は、徳川・松平・神仏・当代の道德等に対しては諷刺や狂態が遠慮され、第三者としての批判的見方が出来なかつた。尤も、これは佃一人に限らな

つたであらうが、佃の句において特にこの感が深い。

児屋根より伝はる藤の葉は広し

(七三・23)

右の句は紋章吟ではなく、藤原の一族について云つたものかも知れない。この句も先ず、前述の句と大体同じ傾向のものと言えよう。

然し、観念的にせよ、自己と利害関係の少ないものに対しては、その紋章吟の諷風も比較的由であつて、謀判者平将門の紋の繫馬を白馬ではないとし、

○黒馬の節会行相馬御所

(七三・2)

と客観的な諷刺を敢てし、北条三鱗紋を握り飯(江戸時代の握り)と庶民的に滑稽化し、最明寺時頼の頃の政治を、

○味噌で呑む頃は崩れぬ握り飯

(一四二・24)

と面白く表現している。

又、伊達騒動を「むつの鳴り」と遊戯的に現わして、「六つ(陸奥)」に対して、板倉九曜巴を巴の数から見えて「二十七巴」と教的対照を狙つて、

○むつの鳴りしずめた二十七巴

(一一三・26)

板倉の紋で伊達評定の句が詠まれたのであつた。

細川九曜星紋で、細川家が和歌の家柄であることを、

○九つの星で歌道もくかららず

(七二・29)

と詠み、山本勘助を遠慮なく、「一ツ目の軍師」と呼び、目の縁で蛇の目紋の加藤清正と並べ立て、

○一ツ目は軍師蛇の目は勇士なり

(八一・23)

とした句など、平凡ながら狂句と言わざるを得ないだろう。

又、お七役者の紋の「封じ文」を八百屋お七の紋と誤認したもの、

○封じ文火へくばつたて名を残し

(六七・25)

としたのはお七の火刑を狂態で表現したものである。

最後に三巴の濫觴を、

○濫觴はきたない故事の三つ巴

(八七・35)

右の句で、「奇態な故事」として、その故事を万人周知の様に言っているのは、知っていない者には教えてやるために故意に右の様にしたのでもあろうか。尤も、眉間尺の話は今と異なつて、案外に有名な話であつたとも考えられる。

さて、佃の高番吟や紋章吟の中でも歎賞的礼讃的に詠まれているもの、作句態度がそれ以外の句の場合とは異なっていること、これは川柳点以来の伝統によつたものにせよ、神仏に対する慶祝を重んずる高番吟の発想を漸次徳川幕府の句の範囲に迄拡張した、めに、句の表現を無味乾燥又は生硬にしていることは、既に文日堂磯川に於ても見て来た処であるが、これを更に忠勇義烈や徳行的な句にも滲透させた最有力者が醒齋佃であつたとするのは私の思い過ぎであらうか。

尤も、川柳点がこの様な道を辿る様になつたのは、選句方式における高番制と高番吟の賞揚にあって、これは我が国の民俗と思い合せてみると、至極自然のこととして、川柳点や狂句の様に奉納句合に於て、特に多数の作句者を動員される民情にあっては余儀ないことであつた。

句に詠まれる対象によって態度を変えなければならなかつたのは、ただ佃一人だけのことではなく、我が国民の自我の在

り方に深因があると気付かされるのは「凶書」(三十九年)に発表された高田氏の記事で、彫刻家の高田博厚氏が、三十年前、スイスのロマン・ロランの家で雑談していて、日本語では自分の言い方を話す相手や場合によって変えなければならぬと言つたところ、ロランにはどうしてもそれが理解出来ず、遂にロランは怒り出して、「そんな馬鹿なことがあるか。どこへ行つたって自分は一つしかないじゃないか。をなせ相手次第で変わらなければならぬ我だ?」と言つたというこのロランの言葉味合つてみると、狂句における佃の態度もが一般国民性の端的な現われであつたとも考えられよう。

居候や奥州の野暮侍、或は昔々の豪傑に対しては完膚のない迄切れ味を示した利刃が、現在の権力や伝統的道德に対する時は、鈍刀に化してう狂句における自我の在り方は即ち、我が国民の自我の在り方の模写に外ならず、この弱点が最も庶民的な末流文芸に於て、江戸っ子の知識階級に於て露呈されているということについては考へべき事が多い。

食品と原資材機械包装の総合誌

## 食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源藏町 5 (361) 9373代  
支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252)4941代  
名古屋市中区村田町 2 (88)9069

# 人生讃

## 河野春三選

兵庫県 常岡孝風

川は流れる歴史の端にいるわたし  
ローカル線故郷につづく母の顔

小心者多き雑音馬鹿になり

敗北の詩集に根性見つけたす

ひかり眼底拳式待つ身にバラのトゲ

バラの芯ある小悪魔の過去おもう

酒愛すころに詩魂持ち合わせ

京都府 大久保和三郎

火中から栗を不貞の眼で拾う

バラ色に明日を育てて今日を脱ぐ

疑えばきりなし闇に矢を放つ

闇に矢をかまえてわれを高く売る

こおろぎの墓に沁み入る断末魔

夢ひとつ育てて細き灯を守る

大阪府 早川清生

古墳発掘 文化は民のものでなし

子が五人育ち家中すべて灯く

芥川賞きのうの友をあばくに似

都会では女 けものの靴を穿く

外交は土曜の夜のただれもつ

噴霧器の農夫天と地撃つかまえ

羽曳野市 井上圭太

蝸の何を激しき自己主張

病舎灼けている寝莫塵の汗をきる

微動だもせず積乱雲 まだ頑張る

闘病日記 空白のまま 雲が遠い

少年犬をつれて夕陽に染まりきる

豊中市 林夢虹

都会 血だけが真っ赤な

都会のくらげとなつて苦悩せず

都会の流砂交通ラッシュへ自己を消し

大都会無精卵を抱く鶏に似て

一円玉誰もひろわない都会

大阪市 今井章雅

ぶつて頭を割って見たらなにがでるだろう

原子力潜水艦へボートのピケ笑い話でない

世の中は広いんだと住めぬ空へ叫び

マルクスの亡霊思想かたまらず

十七字ピカソにメスをもたせたい

今治市 月原宵明

何か探し出そうと秋の雲を追う

赤とんぼ群がり日蝕猖獗す

憤まんと焦慮の味のガムを噛む

緑日のなかで明治を探し出す

羽曳野市 戎川太郎

迫憶はネオンの街に降る月光

愛憎の貌 星辰に浮ぶ夜

星空の彼方が奸策のない世界

偽善の仮面を剥ぐ時何を見る

大阪府 松田半月

がめつきの虫一匹の顔をして

青い山あやしきまでに魂呼ぶ

蝶の翅そろえて雨は降りしきり

鳥の子やっぱり今も黒いはね

大阪市 和田痴亭

妻の空転よろめきテレビが又映る

金も出来たガンも出来た黙殺へ

生身焼かる秋刀魚炎の中で反り

大阪市 西本保夫

意志強固まだパチンコにも触れず



昔なら直訴平社員の意地があり  
孤独性空想完結せず歩く

岡山県 永宗 宗義

入院三年

取りかえる部品が欲しい日の孤独  
愛たしかベッドの下にねむる妻  
安心と不安の窓に鳥唱う

宿毛市 渡辺伊津志

一人子の自問自答は笑えない

蠅の真似するか秋蛾の触手揺れ

仙台市 日 東 里

人倫を説いて緑の酒に酔い

反骨を高く買われて野におかれ

玉島市 井上 旭 峯

諦め直す心へ妻がいてくれず

こうなって理性の針の乱れがち

玉島市 水粉 千 翁

雑草に花あり無縁仏眠る

野良犬がおんなじ道を来て生きる

仙台市 平野 光 道

このごろは蛾も米ぬ宿直室の灯に  
用捨なく柱に釘打つ借りた家

今治市 長野 文 庫

毒舌を通訳少し修正す

内情を聞いて重たい記者のペン

松江市 柳 栄 鶴 丸

大きな頭して知恵のないお方

神戸市 吉 田 隆 史

宝石展覗き零の数こわくみる

羽咋市 三 宅 ろ 亭

成功のかけにいはらの路があった

小松市 関 戸 宗 太 郎

異端者の事故死へ飾る言葉なり

鳥取県 鈴木村 諷 子

使われる方が時計を持っている

京都市 室 井 八 九 寸

道きびし炉火夏を燃え裏千家

金沢市 根 上 杏 花

スモッグにさんまのにおい混って居

倉吉市 奥 谷 弘 朗

味気ない役所務に秋が来た

選后に 河 野 春 三

「人生譜」も、とも角五カ月目を迎えました。

選者として一言もしませんでした、選  
句を通じて、選者の意図する川柳が大体分  
って頂けたと思えますが、まだまだ投句家

が少ないし、従って育成という意味も含め  
て、寛選をしています。月を追うて作家の  
生長と、投句家の増加に伴って厳選してゆ  
きたいと思つていますが、あまり焦る必要  
はないと考えています。

選をしていつも思うことは、何といつて  
もこういう創作欄（雑詠）の投句家は、課  
題吟の場合とはやや趣きを異にしますの  
で、何より、続けて作品を送っていたく事  
が肝心です。一回や二回ぎりで止めてしま  
わずに、選者と体当りする気で、没句にこり  
ず、続けられることです。そうすることによ  
つてその作家の思想や、生活や抒情が選者  
にも鑑賞者にも、選句を通じて理解されて  
ゆくと共に、作者自身も誌上でし、のぎをけ  
ずる事によって進歩し、新しい境地を招い  
てゆかれるのです。

常岡孝風さんなど、失礼ながら最初発表  
の分は殆ど手を入れたのですが、この人は  
よい抒情と思想性があつて月毎に進歩し  
て、前月、今月とよい句を作つていられます。  
大久保和三郎、月原宵明、戎川太郎さん  
らも必ずよい作家になられます。皆さ  
んのたゆまぬ精進を祈ります。『いのちある  
句をつくれ』は川柳雑誌のテーゼでありま  
す。



# 嵐雪・沾徳・鬼貫

— 古俳句と古川柳 (四) —

## 富士野鞍馬

### 服部嵐雪

服部嵐雪は、彦兵衛治助(はるすけ)とい、承応三年甲午(一六五四)江戸湯島の生れで、三十年程武家奉公したが、元祿三年(一六九〇)武士を止めた。芭蕉に師事したのは延宝三年(一六七五)であった。嵐雪の号は、古歌の「花さそふ嵐の庭の雪ならで」に因るといふ。

蒲団着てねたるすがたやひがし山 嵐雪

の名句は、今日なお誰でも知っていて、小唄などにもつかわれ、布団一ツで名の高い東山 (一一二六四)

名高い句京都の布団加賀の唄 (一一二六四)

(一一二六四)

と川柳にもはめられている。加賀の蚊帳は、千代尼の「起きて見

つ寝て見つ蚊帳の広さ哉」である。嵐雪に風乞頼む馬鹿米屋 (一一二八四)

(一一二八四)

嵐雪の妻日和迄よませる気 (一一六一六)

(一一六一六)

其角が雨乞いの句を詠んだので、このような句も作られている。

嵐雪が所へ翁ころびこみ (四二二七)

(四二二七)

芭蕉の「いざさらば雪見にころぶ所まで」に附会して戯作されている。また、

嵐より雪より雨で名を上げる (五九一四)

(五九一四)

は其角の雨乞いの方をほめてい

る。 兩腕の弟子雨も呼び雪もふり (一一三三四)

(一一三三四)

其角と共に蕉門の兩腕といわ

れていた。 この名句以来、「東山」とい

ば「寝たる姿」をすぐ想起するようになり、それがいろいろに川柳に使われ、

四火すへる人に進める東山

母衣唄の姿は夏の東山 (武一四二九)

(武一四二九)

夕立でふとんを洗ふ東山 (一一五二二三)

(一一五二二三)

青葉時萌黄蒲団の東山 (一一三〇九)

(一一三〇九)

上方は山もふとんで寝るところ 入替に庵主は千代と東山 (八四二六)

(八四二六)

蒲団着て寝たる姿やかしわ餅 (八四一五)

(八四一五)

などの句がある。 嵐雪は雪中庵系を興し、宝永四年(一七〇七)五十四才で没し、駒込常楽寺に葬られ、法名は雪中庵不白嵐雪信士とつけられた。近年維新ヶ谷本教寺に改葬され史蹟に指定されている。

水間沾徳(せんたく)

沾徳は、はじめ門田氏のち水間氏、通称治郎左衛門といった。寛文二年壬寅(一六六二)江戸生れで、享保時代、江戸俳壇の中心人

物であった。俳風は、情趣よりも理智を好み、都会的な譬喩俳諧を旨とし、其角一派の傾向に接近している。その点談林風を継承したともいえるのである。享保十一年(一七二六)に六十五才で没し、本所太平町陽運院に墓がある。

初雪や是も人の子樽拾ひ 沾徳

(二九四)

は、人口に膾炙され、今に各所で使われている。川柳はこれを使うが、

名句にはなるとはしらぬ樽拾ひ (二九四)

人の子と通りすかひの名句也 (五九三)

初雪やふらすといいと小僧詠み (七六二九)

(七六二九)

等と詠んでいる。

### 上島鬼貫

(うえしまおにつら)

上島鬼貫は、名は宗近(むねちか)、伊丹の酒造家油屋の一族完春の子である。寛文元年辛丑(一六六一)の生れ、八才で、こいこいといへど螢がとんでゆく

の句を詠んだといわれ十三才で松江重頼の門に入り、十六才の時西山宗因を慕い、二十五才の貞享二年(一六八五)に「まことの外に俳諧なし」と悟ったのは、芭蕉の「古池」より一年前であった。

ぎやう水の捨所なし虫の声 鬼貫

(一一二五)

は有名な作である。

伊丹の鬼も十七で名が高し (一一二五)

と川柳に詠まれ、なお伊丹は酒処であるから、

鬼貫が一桶貫ふ今年酒 (一一五八九)

酒の銘工夫鬼貫たのまれる (一一二五三)

鬼貫も三河の新酒には恐れ (一一六二九)

(一一六二九)

と、酒に因んで想作されている。鬼貫は人格者で俳諧を業とせ

スマートで 着心地良い

GOLDEN O.S.K.の 紳士服

各地特約店に有り

ず、門人をとらず、前句附の加点を拒絶した。その後大阪、京都にも住み、享保十八年(一七三三)薙髪して即翁となり、元文三年(一七三八)七十八才で没した。墓は大坂六万石町鳳林寺と伊丹の豊泉寺にある。

# 大萬川柳

兼題

## 「頭」

入選発表

選者 麻生路郎先生  
 投句総数 三百九十七句  
 入選 五十二句

高槻 丁路 頭から叱ってくれた父も逝き  
 大 阪 良

岡山 哲也 あたま丸めて女に恋終る  
 笠岡 遠二

山口 弘道 講談本読んであたまを空にする  
 泉北 好郎

富田林 美房 頭越しやつのぞけば聖火過ぎ  
 大 阪 阿茶

松原 万竿 仏頭のおいたわしくも虫が喰い  
 大 阪 柳志

大 阪 進之助 金のあるあほに頭を押えられ  
 羽曳野 圭太

大 阪 文秋 犯行の動機あたまにきたとだけ  
 布 施 清人

大 阪 保夫 頭下げてすむことなら割切って  
 大 阪 痴亭

西宮 多久志 黙舌権頭は深く垂れたまま  
 大 阪 痴亭

石川 宗太郎 頭から言訳聞かず金返えせ  
 玉島 旭峯

小 阪 小松園 頭数まだ揃ろわな無駄話  
 玉島 旭峯

米子 雄々 頭より手癖の悪い子に育ち  
 笠岡 忠三

米子 雄々 きれすぎる頭脳職場をまた追われ  
 笠岡 忠三

頭だけ見れば女に間違われ  
 笠岡 真奇

上役はとほける頭別に持ち

大 阪 春 巢

髪黒黒孫をお子さんかと訊かれ

東大の頭を二浪して作り

高槻 静馬

こわそうに花嫁頭あつてみる

頭のこと言わず根気をはめておき

大 阪 十 悟

頭から叱れば暇をくれと言う

ほとほりがさめて頭をただけ出し

頭数だけの票さえ外へそれ

和 泉 東天紅

頭から引きすり出され蝸が売れ

頭数だけを揃ろえて市政ゼロ

弁当が一つ余ったあたま数

大 阪 晃

ゆうづうのきかん頭で坐禅くむ

ツイストを踊るからつぼのあたま

浮浪者のあたまの中のぬくい飯

大 阪 梅里

工事場の頭上注意に腹が立ち

小原女の頭で稼ぐ名所図絵

地位と金でミスグレーにある魅力

五 客

あほになれなれと頭を押えられ

商魂はあたま揃くてとほけると

居眠りはしても頭数のうち

流行を追うてあたまをうたがわれ

大 阪 小松園

挨拶に家元という頭の高さ

大 阪 文 秋

頭数ばかりでろくな芸者来ず

(地)

高槻 静馬

はじめから頭数にははいつてず

(天)

石川 宗太郎

陣笠の頭が邪魔なカメラマン

大萬川柳ベストテン(十月現在)

一 梅里 一九、五大阪

二 静馬 一六、〇高槻

三 きさ子 一五、五岸和田

四 晃 一四、五大阪

五 小松園 一四、五大阪

六 好郎 一三、〇泉北

七 宗太郎 一三、〇石川

八 柳志 一二、五大阪

九 桃里 一一、五笠岡

一〇 方大 九、五倉敷

一 清人 九、〇布施

二 章雅 八、五大 阪

三 木魚 八、五和 歌山

四 阿茶 八、〇大 阪

五 美文 八、〇大 阪

六 美房 八、〇大 阪

七 夢虹 八、〇大 阪

八 遠太 八、〇大 阪

九 達二 七、五大 阪

一〇 春巢 七、五大 阪

次ぎの兼題「つけ落ち」五句以内

以下略

投句先

大 阪 市 阿倍野区松崎町三ノ十

### 一著名作家の川柳句集一

浜田久米雄著

麻生路郎序



好評噴々

定価300円  
送費 50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 **川柳雑誌社**

電話 大阪 (07) 6081 振替口座大阪75050



入門講座

研究題 「煙」

清水白柳

一握りほどの煙りとなるならん  
これは本誌にのつた昭和七年頃  
の句であるが投句の中にこれとよ  
く似た着想の句がある。

人生を煙に壺へ人の嵩 Y  
あの人が煙になつて行くにはい

真砂

人生をの句にはほどことなく理屈  
っぽいところがあつてすつきりし  
ないのが惜しいと思う、人生を煙  
にという語句は適切とは言えない  
のではないだろうか、そして壺へ  
入る嵩というところが理屈っぽい  
のであろう。次の句には素直さが  
感じられて好感がもてるようであ  
る、難を言えば最後のにはいが氣  
になるところであらう。

Y

換氣扇道行く人へもサンマの香  
今日もまたサンマが軒から煙が  
出 K  
伴は煙を立てず秋刀魚焼き

辰 始

換氣扇を探り上げた着想はよか  
ったのだが換氣扇が遅いという表  
現は頂けないし、道路へサンマの  
香が出るというのも平淡であつ

静水  
煙りだけ見てりや工場も赤字無  
く みさ子  
どちらの句も弱いところがあ  
る。それは工場の赤字を外部のも  
のが想像した句だからであらうと  
思う。

宗 義

淋しそうにという作者の感じだ  
がこれは争議に関係しない立場の  
句であらうと思う。これを労使ど  
ちらかの立場から見つめるともつ  
と深さが出るのではないかと思つ  
た。

保 夫

これは何かを思わせるものを持  
っているのだが、こしらえた感じ  
の句になつている。同じ作者の  
煙突の煙りに社宅へ舞い下り

保 夫

の句になるとその情景なり、ま  
たその底にある社宅に住んでいる  
人たちの心情までがよみとれて佳  
い句になつていると思う。

弘 明

恐ろしくかまどか風呂場の煙突な  
のだが思いときだけの句になつて  
いるようである。

与 志

作者が面白がつている句で、第  
三者にはそんなに感銘を与えない  
句である。矢張り真剣に作句に取  
組む心がまえが肝要だと言える。

Y

逃げる程焚火の煙り廻つて来

松 風  
手をかざし焚火の煙に身を反ら  
し 滋 雀  
不機嫌な方へ煙りの向く焚火

弘 明

主婦の会の句にはスケッチ的な  
面白さがあるがそれだけに終つて  
いるのは惜しいと思う。後の句は  
同じところを詠んでいるのだが、  
初めの句は逃げる程というところ  
に、次の句に手をかざしという動  
作に、そして最後の句の不機嫌な  
という描写に、それぞれの句の持  
味が出てくるのである。さて公害  
というのだが、

万 竿

税源の工場様の毒煙  
ランチタイムの団地へなびく黒  
煙り M  
公害の煙会社はよく儲け

Y

風下の煙りの被害はつとかれ  
H  
対策はこれからのコンビナート  
の煙 愛 鳩  
税源の句は面白いのだが工場様  
が少しおどけた感じがするのだが  
どうだろうか、中の三句はそれだ  
けのことで、取り立てて言う難点  
もないのだが報告的な句想に終つ  
てからという風刺は鋭いものがあ  
ると思う。

H

スモッグの批難に煙知らぬなり  
H  
煙都大阪スモッグオーヴアー昼  
ライト 秀 夫  
けむり煙中卒の目が燃えて着き  
酔 夢  
スモッグの句の作意はよく判る

H

煙吐く汽車を気水にババと待ち  
保 夫  
島の子に煙が走る陸が見え  
静 水  
いやいやをしてトンネルを抜け  
るケム 秀 夫  
以上の句に代表されると思つ  
た。

保 夫

なんやもう煙だけだと火事見舞  
和 三郎  
それらしい煙をさがす昼の火事  
愛 鳩  
プロバンの爆発火煙見て魂消

和 三郎

汽車の煙を詠んだ句も十数句あ  
つたが汽車をなつかしむというだ  
けでは句として生きていない、よ  
かったと思うのは、  
孫連れて煙吐く汽車迂回する  
隆 史  
煙吐く汽車を気水にババと待ち  
保 夫  
島の子に煙が走る陸が見え  
静 水  
いやいやをしてトンネルを抜け  
るケム 秀 夫  
以上の句に代表されると思つ  
た。

隆 史

繁太郎  
前の二句は立派に出来ていると思つた、三句目のプロパンの爆発は最近芥木で起つた事件を詠んで居られるが時事的な感じがする。魂消は「たまげ」と仮名にした方がいと思われ。旅に關した句の中から

噴煙を自慢しいしい茶屋稼ぎ 万 竿  
行く船の煙りが誘う旅心 真 砂  
湯煙りに民謡もある田舎バス みつを

どの句にも共通して言えることは深さが無いということである。いい素材をつかみながら訴えるものがないのは矢張り表現法に欠けるところがあるのではないかと思える。

咽せそうな煙に輝く不動尊 辰 始  
線香の煙りか護摩の煙りが渦巻いて不動さんの姿を詠んで成功している。素材のつかみ方も良いと思つた。

玉手箱あけてくやしい白煙 H  
しまつたと浦島あわててふたをしめ 句楽坊  
前の句は洒落氣をふくんでいるのがいけないと思つた。だれでもが使う洒落言葉だけは句として成立たないと言え。次の句はあわててふたをしたであろうと作者が想像したのが成功した句と言えるのである。

文を焼く煙に涙腺刺戟され 弘 村  
字の使い方に苦心して居られるの

### 金泥集

#### 選乃莖麻

瓜  
マニキュア糸もちへ一寸苦勞する 阿 茶  
父の旅小鳥の瓜が長くなり 同  
主婦の座は瓜染める日もなかりけり 同  
巻寿司へ瓜の汚れを氣にもせず きさ子  
氣に入らぬ構図へはし瓜を噛み 同  
ピアノ弾く家にも祖母の琴の瓜 一 栄  
爪磨く猫に建具はしてやられ 同  
爪で火をともしためて貸したをれ 徳 子  
爪で火をともしためて貸したをれ 徳 子  
診断も怪るくすませる爪の色 同

つまはじきされた村から寺の寄附 同  
いさかいの因は娘の赤い瓜 清 子  
爪に垢ためたまんまの Copp 酒 同  
爪赤く塗ってすさんで行く暮し 醉 夢  
爪びきの母の心にある孤独 同  
爪染めて心のそまぬ夜に生き丸 子  
爪の色冴えて退院近い日々 同  
マニキュアの色また変えている多情 弥 生  
青春を謳歌するよな爪の色 千 夏  
窓口の言葉冷たし赤い爪 花 梢  
爪のあかせをしてのめとひねくられ みさ子  
床柱とも知らず飼猫爪を研ぎ 勝 子  
年に似ずマダムの爪は赤すぎる トメ子  
爪染めて金のいらぬ酒を呑み 周 甫  
病み上り日向で眺める爪の色 お 悦

次回題「あきらめ」切十一月末日

がよくわかるが、その割に句意が平淡になっているのは惜しい、併しその努力はうれしく感じた。煙草に關する句も多かった。その中から

禁煙の車内に煙ここかしこ T  
禁煙の暗い座席でむせている T  
禁煙にけむり見てから火をつける 醉 夢  
初めの句は禁煙の車内にけむりが立っているというだけで、それに対して腹立たしい気持があるのだが、それが句に出ていないのが惜しい。次の句は暗い座席だから映画館の中だと思ふのだが、むせているのが吸っている本人なのか近くの人のか判らないだけにこの句も惜しい。後の句のけむり見てからは面白いと思つた。そこに人間の弱さとするさがあると思ふからである。

御婦人がむせてあわてて消すタ バコ 弘 朗

盗みたばこ煙が出ると困るなり 雄 声  
煙からばれてとうとう本音はき 千 夏  
三句共ユーモアがあつていいと思つた。こうしたところに川柳のたのしさがあるのであろう。

良い事があるか煙草の輪が空へ 八 文 鏡  
煙輪に吹いて待つ身に人の影 勝 子  
将棋盤優勢煙輪にかわり 八 郎  
この三句にはスケッチ以上のものがないと言えようである。情景はいいのだが深さが足りないと思ふ。その点から

煙草ふきかけ女の目は誘い 滋 雀  
になると情景もよく現われているし、その感じも、うかがえていい句だと言え。

肺ガンがなんだと煙草くゆらせ 秀 夫  
着想はよいのだが表現が平淡になる

なつたのは惜しいと思ふ。その次は耳からけむり子に困り 与 志  
その次はという説明はいらないように思ふし下五文字の子に困つてもらえないと考えられたのだと思ふが次のように添削してみた

耳からもけむりを出せとせがまれる「こうする」と説明調がうすくなると思ふ。人間的な煙の句を少し見てみよう。

嘘七分煙にまいてまだ続き 東 天 紅  
煙にまくつもりのお話術が善かれない みさ子  
出たためのホラ大衆煙に巻き 花  
陳情困煙にまかれて引下ろ 千 夏  
けむに巻くといういい言葉を使いながら句が余り生きていないのが惜しいと思ふ。表現技巧がもう一つというところである。

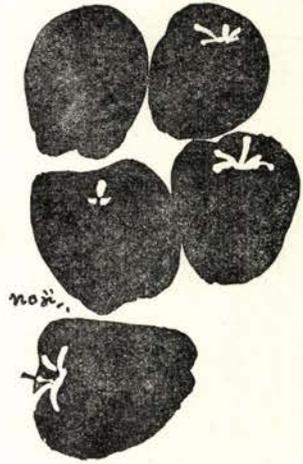
父親の無口を子等が煙たがり 〇  
次回研究題「留守」 五句以内  
切十一月三十日  
宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四 清水白柳

これは私の四十年前の作品である。 白 柳  
作者は専売公社に勤めて居られるのでこうした句が生れたのであるが、作者本人にとって感銘の深い事柄であっても作者以外の人はそうした感じがわからないことがある。それを判ってもらえるように表現方法を練ることがこの講座の一つの目的でもあるので考えて見たいと思つた。

退屈の煙りは消える迄見つめ 松 風  
これはよくうがっていい句である。さて一句だけ前書つきの句であった。それは  
葉たばこ収納所にて  
屑葉焼くかまどの煙におい出し

# 集路一

子岸論  
者 東愛  
選 松 下  
場 水 森



## 市場没食子選

さぼること知らないような嫁でよし 秀 峯  
内職のあるのがさぼる組に入り 伊津志  
精動に見せてお役所よくさぼり 万 竿  
さぼるだけさぼり友にノート借る 吉備郎  
意見する親にもさぼった覚えあり 雅 城  
さぼるだけさぼり早々退け仕度 日東里  
クーラーでひんやりさぼる 社長留守 李 馬  
さぼるだけさぼり責任回避する 古 心  
生活がさぼりたい気にむちを打つ のぶ子  
ハセ日和会社さぼった顔があい 光 道  
合理化に反対ストにサボタージュ 藤 波  
横車押す宣伝のサボタージュ 雄 々  
胃腸薬まっちりのんでさぼってる 淀 月

さぼる気はないが女の立話 保 夫  
課長出張あみだくじして話の輪 隆 史  
ほんとうはさぼっておた舌を出し 千 翁  
うまくさぼって得をしたように云い 不 二  
休暇みならぬ損やと現代娘 みつお  
さぼっては胸をはすまずデート持ち 松 風  
ニコヨンのさぼり見ていて腹がたち 十九平  
出勤の判さぼらずに押ししておき 木 魚  
切手買う列へ遅参をして並び 井 蛙  
学校をさぼり時間を持って余し 勝 子  
アルバイにやむなくさぼった事実 八九寸  
さぼっても求人難に助けられ 滋 雀  
先輩の入知恵さぼる手を覚え 代仕男  
さぼったが結句金が要っただけ 旭 峯  
落第ならぬ程度に出席し 志津子  
さぼること知らぬ明治の父きびし 酔 夢  
休養と云う口実で父さぼり 句乗坊  
せめてもの抵抗一寸さぼっても見 野迷路

通信簿母に覚えのない休 伊久野  
ええことを云うがなとさぼり組に入り 初 甫  
入賞で会社さぼったことがばれ 宗太郎  
要領を本分としてよくさぼり 鶴 丸  
弁当を下げてパチンコ屋でねぼり 杏 花  
失恋はこゝから日記つけてなし 光 郎  
鍵つ子の反抗いらくときさぼり 半 月  
教室を抜けて喫茶で怪気焔 惠二朗  
適当にさぼってゴルフ身につける 章 雅

### 人

マ、ボリスにさぼった顔を見透かされ 惠二朗

### 地

事故に巻き込まれ仮病ばれかかり 涼 人

### 天

棒グラフさぼってるのに群を抜き 章 雅

### 軸

悠々とさぼっていてもノルマ上げ

## 空地

### 永松東岸選

一坪の空地に庭木も花も植え 秀 峯  
草生えていても空地の値が上り 雄 々  
一握りの空地が欲しい団地の子 雄 声  
駅前空地で屋台が夜を稼ぎ 井 蛙  
ビル建って空地の虫は追い出され 李 鳥  
住むとこがない東京にある空地 宗太郎

有刺線でかこんで値上りまつ空地 光 道  
車庫作る空地もないのに車買ひ 古 心  
非常線空地を遠巻きして固め 十九平  
真つ暗い空地へ星の雨が降り 千 翁  
やるせない空地がほしい二階借り 同  
療養所空地に茄子もぶらさがり みつお  
売った土地あつたらなあと思ひ 旭 峯  
空地からボールが硝子割りに来る 杏 花  
立札がそろそろくさって来る空地 宗 義  
蚊の団地見たい空地の水たまり 惠二朗  
空地から工事場へ打つホームラン 晃 男  
建つまでの空地広告料で稼ぎ 隆 史  
オールドミス空地をさがす金を貯め 保 夫  
嫁とれば別居の出来る空地なり 弘 朗  
知らぬ間に空地の隅へボンコツ車 淀 月  
乗り逃げの單車空地で錆びており 愛 鳩  
空地だけ残し名家は売りに出し たけお  
膝枕旦那は空地売る話 雄 々  
学校の空地へ校長鎌を振り 宗太郎  
街中の空地他人の気をもませ 映 輝  
この空地通ると近い社に勤め 光 郎  
建つ見込みないらぬ空地へ滑り台 初 甫  
銀行が来そうな空地という見込み 木 魚  
犯人の兇器空地で探してあて のぶ子  
広い広い空地を持って寝て暮し 藤 波  
ひまわりが空地の主のように咲き 伊津志  
周囲から空地を少しつつせばめ 同

### 五 客

# 恒雄逝く



に加賀市作見町ワ十二番地の自宅で急逝さ

恒雄・中松一恒氏  
(川柳不朽洞会員)は  
九月二十六日午前六時

れ、二十七日午後二時  
から加賀市作見町公民  
館で告別式が営まれ  
た。急逝は過労が原因  
にもたれながら、前日  
から身体が辛いと言っ  
ておられたそうである  
から自分で注射を打つ  
つもりではなかったと  
想像されるとのこと、  
まことにあつたらしい死  
であつたらしい。法名  
釈法恒、享年五十歳、  
謹んで悼む、氏は大正

三年九月二十三日小松  
市日末町ム一四八番地  
に生まる。大阪医科大学  
を卒業後、加賀市作  
見町に中松内科精神医  
院を開業され斯界の為  
大いに尽されていたが  
惜しくも夭折された。  
川柳に手を染められた  
のは昭和三年頃だとの  
こと。多くの名句を残  
されて。ご遺族は  
未亡人泰子さん、長男  
立夫さん、長女佳子さ  
ん、次女美子さん。

## 恒雄句抄

死んだ後妻を貰うでしようと思  
新しい母へ小さい順に馴れ  
カロリーを計る嫁来て味が落ち  
鳩ほっほ歌へと音痴いじめられ  
数の子の味知らぬま、子は育ち  
べんちゃらを尽し女中に居て貰い  
子の頭親はテレビのせいにする  
仏様になつても大きい墓小さい墓  
風と共に去りぬ選挙も公約も  
借る苦勞返す苦勞の一生か

市街地の空地民事でもめている 涼人  
スモッグの中の空地で手が出せず 春己  
手離さぬ空地斜に径がつき 日東里  
鍵っ子の窓から見えている空地 章雅  
戦災の空地さがしても見当らず 半月  
もう二尺空地がほしい青写真 木魚  
寸土余さず窓際へ建て迫り 八九寸  
天 売ることも貸してもくれぬ空地なり 木魚

## 楽屋

### 森下愛論選

厚化粧地肌が泣いている楽屋の灯 勝子  
8ミリの音も楽屋にインタビュ 滋雀  
かくしゃくと老優楽屋でくこを呑み 光郎  
楽屋裏かなえてほしい夢が待ち 保夫  
楽屋では種も仕掛も広く置き 代仕男  
舞台はねタレントはつと楽屋落ち 繁太郎  
理事長も楽屋で化粧慰安会 隆史  
楽屋ではきつちり着てるストリップ 春己  
楽屋から非常階段だけが見え 同  
楽屋裏座長きちんと座つてい 秀峰  
本当の芝居で楽屋記者を避け 涼人  
何時の世の楽屋を遊ぶ人が居る 伊津志  
芸どころか生きるためなり楽屋の灯 光道  
楽屋入り万才別の顔になり 万竿  
寝返りを打って楽屋の秘を暴き 藤波  
楽屋から台本にない声もれ 宗太郎  
楽屋裏さきさきみたい心理あり ろ亭

楽屋でも人気の落ちたを淋しがり 雄々  
楽屋前黄色い声のピケを張り どんたく  
大受けが拍手でわかる楽屋裏 志津子  
楽屋まではいり黄色い声を出し たけお  
楽屋から拍手がおこる村芝居 愛鳩  
格式のうるさい楽屋誰も来ず 淀月  
楽屋にも今日が初日と言う空気 木魚  
馳け落ちの手管楽屋へ青い月 章雅  
はねどきは楽屋あげてのお見送り 雅城  
本堂を楽屋へ区切る村芝居 日東里  
待機の姿勢も辛いもの、楽屋 雄声  
楽屋での老はれカケラもない舞台 八九寸  
敵として楽屋に残る階級制 同  
楽屋からのせげば美男美女でなし 酔夢  
舞台と楽屋息通わせて芸の虫 初甫  
楽屋内見せず寄附帳わりをする 李鳥  
楽屋ではパパもきびしい師匠さん 鶴丸  
熱演の楽屋でそばがのびている 不二

舞台より楽屋通いが高くつき みつお  
学芸会楽屋で先生狼狽える 同  
楽屋ではもろ肌腕いで若づくり 松風  
子の舞台楽屋で母は汗しほり 杏花  
夜の部まで楽屋で待つ、斬られ役 千翁  
出を待って息を合せている楽屋 同  
母さんの顔に戻った楽屋 風呂 十九平  
パトロンがちょい／＼覗く楽屋裏 同  
記者の眼が探る波紋の楽屋裏 旭峯  
夕月に我が家の楽屋のぞかれる 恵二朗  
兄弟子の顔に返っている楽屋 宗義  
大入の出た夜の楽屋が静かすぎ 同  
楽屋では昨日の続き今日ももめ 古心  
楽屋でのインタビュ喋古らぬ事だらけ 八九寸  
天 新入りの泪楽屋の壁が知る 吉備郎  
楽屋風呂一太刀浴びた首が浮き 井蛙



鳴風・田中辰二氏(熊本)を病床に見舞うた路郎主幹  
——十月九日(左)鳴風氏・(右)路郎主幹・(中)八代氏の占良

# 柳界展望

句会

▼本社句会「文化の夕」は十一月六日(金)午後六時から千日前電停東入ル自安寺で開催される。文化月の句会を意義あらしめるよう柳人諸氏お誘い合わせの上、多数のご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳部句会(和歌山)は十月七日(水)午後六時から北新地の朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)十月例会は十五日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪)十月句会は三十日(金)午後六時からコクヨ株式会社社会議室で開催。▼大阪通信病院川柳会十月句会は三十一日(土)午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼川維備前支部十月例会は十月二十四日久米雄居で開催。▼川維出雲支部では十月十八日に平田市の康国寺へ吟行をされた。参加者十五名、秋晴れて名園にとけこんだ。▼岡鉄クラブ文化部主催秋李川柳大会は十月十一日岡鉄

クラブで開催。久米雄、素身郎、七面山、静水、秋月、美舟、宗義諸氏の名が寄書に見える。▼オリック記念祭川柳献題式が、川柳並木会(笠岡市)の主催で十月十一日(日)午後一時から山口八幡神社で開催。献題者二十七名、吟行句会は九月二十七日美濃谷の松木屋で開催。鮎を賞味された。▼文化祭参加豊中川柳会は十月十一日(日)午後十二時三十分から豊中央公民館で開催。▼第十四回広島市短詩型文芸大会川柳の部は十一月八日(日)午後一時から広島市比治山公園入口頼山陽文徳殿で開催。▼岸和田市民川柳大会は、きしせん創立十五周年記念句会を兼ね、十月二十五日(日)午後一時から岸和田市民会館和室で開催極めて盛況であった。▼文化祭協賛の富田林市民川柳会は十一月八日(日)午後一時から杉山邸で開催。▼西宮市川柳大会は十一月八日(日)正午から阪

## 消息

▼路郎主幹は十月九日(金)午前八時三十分伊丹空港発熊本市へ。田中辰二氏の病床を見舞い、空路大村市空港で諏早川柳人に迎出をうけ、川岡霊眼子氏夫妻の款待を受けられ四泊、その間、池田可宵氏(長崎市)ら川柳家と交歓され、十三日(火)午後一時三十分伊丹空港着の便で無事帰阪された。▼橋本緑雨氏(大阪)は十月四日、二泊四日の日程で奥能登、和倉温泉に清遊、郷里金沢では菓参をされた。▼海岸の説明あとのバスも止り。▼三条東洋樹氏(神戸市)は急性肝炎のため八月中旬頃より川崎病院入院加療をされたが、秋の好季節になるに伴い、殆ど快癒、十月十七日退院され、当分自宅で静養を続けられる。「退院を待ってたように菊が咲き」▼米沢晴明氏(大洲市)から、「翠平に来ました。年」といふ。何百段の石段には汗をかきながらふらふら。記念写真を撮るので遂に上にも登りましたが、「翠平へきまつような旅程にて」▼田中美喜さん(熊本)から、路郎先生へ「この度ははるばる主人の病氣お見舞いとご来熊、有りがたく心より厚くお礼申し上げます。と同時に数々の尊いご講話も伺わせていただきました。主人の喜びは申すに及ばず、



路郎師を迎えて——諫早文化会

(前列左から) 肇栄・五竜・路郎先生・雲四子・美寿栄・(中列) 藤範・和子・晴賢・好子・福心(後列) 卓二・正義・栄人・飯子・重倍・万象の諸氏

場なれしたベテラン柳人にとつては、句会は作句以前のものがあり、別種の「一会合」の面白味を感じ出している。句会のセクト主義的な持味は、こうした人々から醸し出される。それを一段と煮つめたものが幹事会、理事会だ。

私が現在の句会は「親睦」だといつたのは、多分に固定化した、一味同心の集会を指しているが、さりとて、今の句会の在り方はどうだから、こうしなければならぬ、というものは、そうした句会の「馴れ」から出てきたものとも考へる。実際のところ、馴れは退屈で無意味なものと感じやすい

(19ページからのつづき)

だが、こうした睦みの場にも、そうとはみえない人達が必ずいる。この人たちは決して「親睦」とも「座興」とも句会そのものを感ぜないで、作ることの楽しみ、それを選んでもらった歓び、他の人の句を鑑賞しながら、先輩、有識者の話をきき、自らの作句上に何かを得ていく。このはげみに変っていく川柳への関心は、先輩、後輩、熟練と未熟のアンバランスをなんとはなしに地ならしをしていく、その場が句会だ、そう信じている。この意識は柳誌のもつまスコミのアピールの介在によって作句効率は得難いものともなる。だが、これはあくまで試作時代、初歩から中堅に歩み出している人にも多いようだ。



いのある句を創れ



投稿規定  
▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月十五日▼投稿先  
本社宛

本社 文蝶追悼句会 (大阪府)

10月8日 午後6時  
会場——千日前 自安寺

本社の十月句会は、文蝶の最後の句会  
場だった自安寺で、文蝶追悼句会を催す  
事になり、遺族を聘して厳修裡に行なわ  
れ、正面に飾られた君の面影は、在りし  
日のそのままの、温容で、居並ぶ柳人に  
ほほえむがよう、強く胸を打った。本日  
の清水白柳氏の句評は、心なしか文蝶を  
哀惜するが如く淋しさを一層感ぜしめら  
れ、殊に文蝶氏の句並に文蝶を悼む句を  
挙げ、特に野添路氏の「合掌へまだあの  
世からそれはねえ」の句は注目を集め  
た。

後ち、席題の披露後、土井文蝶夫人、  
並びに令息を初め、本社不朽洞会を代表  
して、若本多久志氏は、故人の写真の前  
に、一同も続いて黙祷を捧げ、冥土の君  
としはし心の接衝をなす有様、兼題の披  
講に立たれた路郎師は、土井文蝶氏の功  
を讃へ、感謝の言葉もときれ勝ち、惜し  
き人を夫はれた路郎氏の御気持も察せら  
れた。因みに本月の不朽洞杯は、ベテラ  
ン菊沢小松園氏の句に輝いた。時に午後  
十時。(肇)

主賓——土井きよ夫人 土井勝彦氏  
出席——路郎、摩天郎、八郎、東天

紅、恒明、水客、多久志、たつみ、専  
翁、柳志、圭井堂、白溪子、滋雀、好  
郎、いさむ、白柳、瓢太、文秋、歩将、  
一栄、清子、柳宏子、文夫、千夏、珠  
笑、秀委、静馬、梅志、水京、野迷路、  
一舟、吉備郎、金三、栞、清人、草々、  
良、トメ子、真砂、明子、句楽坊、有  
子、進之助、小松園、紫香、美房、庸  
佑、阿茶、季賛、豊乃、宏子、

兼題「英会話」 麻生路郎選

できそうもないのがうまい、英会話  
英会話熱あがる程すれていき 秀夫  
通訳がどもりであった英会話 隆子  
英会話その機もなく五輪過ぎ 宗義  
英会話習わぬ車夫の方が上 八九寸  
警官のセスチャあざやか英会話 与志  
ホステスの条件の一つ英会話 三時  
度胸だと教え速成英会話 どんたく  
英会話うまい商社の女秘書 章雅  
英会話宿語の女中が試したく 東雲楼  
英会話単語カードを繰ることく 句念坊  
独り相撲だけで実らぬ英会話 旅風  
口許の動きでヨメた英会話 繁太郎  
羽田発つ専務のポケットに英会話 黙平  
How do you do だけは社長も覚えとき  
アイシー・アイシー・何もわかつて  
待ってましたと英会話買って出る 多  
売上倍増五輪へ英話のトラを持ち 梅志  
英会話いつもサボッテ居りました 草々  
英会話しどろもどろが縁となり 摩天郎  
過去秘めたオンリーワンの英会話 明子  
英会話本だけ買って五輪すみ 滋雀  
美房

英会話一つ覚えが役に立ち  
助教授にされたがヤハリ英会話  
金かけて通用しない英会話  
イギリスを立つと忘れれる英会話  
外遊に間に合う会話だけ習い  
英会話に弱い社長で廻り椅子  
英会話できる娘で身をくずし  
英会話子供に発音直される  
入歯がた附かせて達者な英会話  
英会話自信あるのが吃りがち  
苦勞した英語手真似がよく通じ  
サヨナラで終る羽田の英会話  
英会話ベラベラの娘を秘書に連れ  
英会話判らぬとは笑うとき  
英会話習う子の夢親の夢  
英文法知らぬ女給が会話する  
欠伸する舞妓へ仕込む英会話  
英会話人妻として死蔵する

梅志  
白柳  
専翁  
多久志  
摩天郎  
東天紅  
いさむ  
小松園  
静馬  
水京  
真砂  
阿茶  
好郎  
柳宏子  
文夫  
圭井堂  
高志

兼題「つば」 川村好郎選

流つばの深さに身投フトおじけ  
思つばを通りパトロン聞いてくれ  
土払い落せば飛鳥の壺の艶  
山狩りも肥つばまでは気がつかず  
思つば彼女もムードに酔うてる  
つばちよつと分つてからのゴルフ熱  
骨壺を母暖かく抱いてやり  
大物の口をすべらすつばへ触れ  
学理より相伝のつば鍼灸師  
怒つたら思つばだだが笑い出し  
つば算のうまい女房に押し切られ  
無口だがつばはきつちり押えて来  
思つばにはめたるつばが嵌まつた  
思つば女は酔うたふりて聞き  
蛸つばに似た誘惑へはまり込み  
腹案のつばへなかなかな落ちて来ず

東雲楼  
白溪子  
小松園  
柳志  
清人  
どんたく  
多久志  
文秋  
八郎  
良  
白柳  
圭井堂  
静馬  
阿茶  
一栄

兼題「秋の酒」 西尾 栞選

秋の酒妻も和服になって酌ぎ  
嗜むとよくぞ云いたり秋の酒  
秋拾女も今日は呑むと云う  
秋の酒素直に酔えば月白し  
酔う程に泣けてきそうなる秋の酒  
海山の味覚がそそる秋の酒  
秋深し酒倉はこうじの香に満ちて  
秋の酒未来のことや過去のこと  
秋の酒うまし牧水たらずとも  
老人の佳き日互いに飲み交わし  
義理の子と打ち解けて飲む秋の酒  
茸狩りの社長アソビで飲んで待ち  
湯豆腐がそそろうまい秋の酒  
秋柄をねだる気のある酒が出る  
Y談も佳境に入って秋の酒  
台所虫の声止む盗み酒  
秋の酒月が出ようが出よまいが  
秋の酒歳をしみじみ考える  
秋の酒別れ話に相応しく  
オリンピックが静かな酒にしておかず  
チアンチエウで仲鷹月をくらませる  
同じ酒秋には秋の味があり  
酒うまし信貴と生駒に秋の色  
呑んだだけ身についたよな秋の酒  
晩酌の追加がほしい秋の酒  
ヒレ酒があると張り出し秋深し  
本家銘競うて秋の酒蔵開く

隆子  
章雅  
旅風  
花梢  
野迷路  
与志  
どんたく  
静馬  
専翁  
小松園  
静馬  
白溪子  
滋雀  
多久志  
文秋  
草々  
白柳  
小松園  
句楽坊  
庸佑  
清人  
一舟  
柳宏子  
文秋  
金三

一人鑑きいて大和路の秋の酒 文夫  
秋の酒もろみの良さが分りけり 梅志  
百姓に生きぬく秋の祭り酒 柳志  
菊仲間しずかな酒になつてくる 水客  
ひとり酌めばいみじくも亦秋の雨 栞

兼題「玉串」 八木摩天郎選

ためらわず遺児玉串を戴いて 黙平  
玉串を手にしたときは三カ月 高志  
玉串を捧ぐ汚職の悪びれず 与志  
玉串の順序でもめる地鎮祭 どんたく  
玉串もピンからキリの拝みよう 東雲楼  
玉串へ今更では無い二人 花梢  
玉串を持つつぎこちなきモーニング 八九寸  
玉串へ母の祈りは只一つ 清子  
玉串の告別式にちとあわて 白柳  
僧籍の知事玉串を捧げもち 栞  
仲人もなれて玉串板につき 歩将  
玉串を捧げる時に要る社長 どんたく  
玉串へ歩巾が揃ううれしい日 阿茶  
玉串にこだわりまよふと現代っ子 八郎  
玉串の間は人形になりすまし 一栄  
十代の玉串邪魔くさそうに置く 圭井堂  
玉串の順をワクワクして迎え 多久志  
玉串奉奠する奏楽へすすり泣き 進之助  
玉串へ誓った愛をもう忘れ 文秋  
玉串へ孕んでるのも見透され 滋雀  
玉串で粹を集めた渡り初め 圭井堂  
玉串へ誓ってからの変わりよう たつみ  
玉串へコンペヤー式で押し出され 滋雀  
仲人が先ず玉串をまぢがえる 文夫  
飛行機で来て玉串あげただけ 良  
親の顔立てた玉串とは言わず たつみ  
新郎の方が玉串ふるえてい 好郎  
玉串へ済まぬお腹に子を孕み 白溪子  
逆縁に持つ玉串の手もふるい 句楽坊

末席は各自玉串持ちなはれ 静馬  
玉串の誓へ巫子がきれいすぎ たつみ  
玉串も離婚もスターは計算し 滋雀  
玉串で工事始めた原子力 圭井堂  
玉串へ親娘の視線ふとからむ 水客  
玉串は勝手の手で弄り 文秋  
玉串の列に汚職の顔ならべ 小松園  
玉串の慣れた手つきも金バッヂ 美房  
玉串が余って僕も奉り 珠笑  
玉串奉呈技師の目にも光るもの 好郎  
玉串へ過去は清算したつもり 水京  
もう合えぬ玉串父はさげ立つ 摩天郎

席題「飲み友達」菊沢小松園選

禁酒三日よつてたかつて飲まされる 圭井堂  
顔の効くとこへ互いに誘い合い 清子  
縄のれんまた合いました飲み仲間 東天紅  
アリバイを飲み友達に頼んどき 好郎  
死んでから飲み友達の良さわかり 静馬  
貸し借りのけじめもつけず飲み友達 多久志  
一升瓶持参に女房もことわれず 静馬  
飲み友達飲む迄ケチなことを言い 栞  
飲み友達丈が左遷を送りに来 柳志  
気がつけば呑み友達が一人缺け 梅志  
土端場で飲み友達の知恵を借り 一栄  
呑む量は違うがどこか合う 一丹  
飲み友達丈は知ってる左り前 柳志  
禁酒して飲み友達にさげすまれ いさむ  
証明を飲み友達にして貰い 滋雀  
飲み友達一人にされて焼香し 水客  
誰よりも飲み友達に惜しまれる 水京  
真つ先に馳けつけたら飲み仲間 多久志  
花でよし又月でよし飲み仲間 進之助  
それを飲み友達へ留守つかい 小松園  
席題「おもかげ」後藤梅志選  
おもかげは笑い顔までうり二つ 失名

死んだ見のおもかげと秋の風 多久志  
おもかげを末っ子に見て胸を打つ 白柳  
おもかげのパパはいつでも笑うと 清人  
おもかげが父に似てくる子を育て 草々  
全盛のおもかげもなくさう生き 庸佑  
面影もだんだんうすれて ミシン踏む 水客  
父そつくりのおもかげで遺児掌を合せ 栞  
おもかげと三人の子に打ちたれ 清人  
母の帯しめて言葉も母に似る 水客  
おもかげはお下げの髪が長かった 小松園  
面影を憶はれる徳もって死に 柳宏子  
面影が母に似て来た七回忌 摩天郎  
アルバムに話しかけた日の記憶 進之助  
面影を追えば秋の夜は静か 紫香  
おもかげを電話の主に追い続け 野迷路  
おもかげは母の形見を着る娘 いさむ  
亡き父のおもかげも有る羅漢菜 句楽坊  
ゆるるさね恋おもかげがつきまとい たつみ  
面影がひとりぼっちになろうき 紫香  
まだ生きているか見える父の顔 梅志

席題「親切」 吉田圭井堂選

席談った方が照れている若さ 柳宏子  
式までは親切過ぎる人でした 清子  
親切もほどほどですと妻は妬き 一栄  
親切を売り物にして立つ野心 進之助  
親切にひっかかるなとおせつかい 勝彦  
親切が過ぎてみんなに後指 明子  
親切な男はんやと馬鹿にされ 東天紅  
横断歩道親切なのがあわたり 白柳  
親切で云うてあげたらおこらばり 静馬  
婚約が成って親切薄れだし 珠笑  
親切を何か底意と感じられ 歩将  
親切が過ぎて夫婦仲がわれ 庸佑  
親切をまともに取れば裏があり 金三  
当然の事親切と感謝され 一丹

尻込みをいしい親切受けて居り たつみ  
独身と聞いて親切さが変り 紫香  
汗かいてまで親切が荷を助け 白溪子  
親切な人や親が先に惚れ 文秋  
親切が出来るチャンス又逃し 柳志  
親切にされてだんだん怖くなり 紫香  
下心ある親切を見破られ 小松園  
ささやかな親切でかい記事になり 柳志  
親切の度が過ぎ変にうたぐられ 清子  
親切な人とうしろを弄んどき 一丹  
200CC見知らぬ人の血を貰い 進之助  
とどけた財布で幾度か呼び出され 千夏  
親切を変にとられたあはらしさ いさむ  
親切な私服ヤクザと間違われ 静馬  
親切に立ってやつたを断わられ 圭井堂

川維 阿倍野支部句会(大阪市)

先生が代って才能引き出され 良  
個人でも女将社用にしてしま 静馬  
毒舌が冴えずみんなが心配し 阿茶  
主婦の座をマネキン嬢が忘れさせ 一丹  
才能のない末っ子に養われ 柳志



遺言はなくともわかる父の肚 好 郎  
 才能をみとめ無口になってくる 水 客  
 空巢から団地の主婦の顔つなぎ 梅 里  
 才能は平で終ると妻も知り 滋 雀  
 遺言の大阪弁を録音器 萬 葉  
 洗濯の主婦にテンポの速い雲 滿 潮  
 遺言を養子布団の裾で聞き 金 三  
 個人的には忍びないがと断られ 八 郎  
 才能の美名で酷使されつづけ 白 柳  
 あつたらの才能酒に消され行く 小松園  
 腹案を知らず毒舌あびせかけ 一 栄  
 リビエンキツチうちには遠い主婦の夢 凡 子  
 才能におほれる間に追い抜かれ 文 秋  
 合掌を解けば貧しい手に戻り 市 郎  
 走る子の背丈で子守随いてゆき 同  
 下積の何んでもあやうき役が主婦 専 翁  
 無心言うとき合掌のくせが出る 静 波  
 主婦達が一番恐いと市長さん 慶之助  
 才能の限界に来て死を選び 清 子  
 遺言になかった通夜の女客 弥 生  
 主婦の座のまだ十日目の市場籠 東天紅  
 合掌へ涙を落とす女が来 野迷路  
 遠くとも安い市場へ主婦は行き 双 葉  
 才能があるのに惜しいへそ曲 痴 亭  
 寝室がやと個人に帰らせる 宗 義  
 地方選党より魅力のある個人 清 人  
 同窓会最後は主婦としての愚痴 雄 峰  
 主婦代表長屋に縁のない身なり 順 三  
 黒門で何にしるか主婦なやみ 句楽坊

川 雑 王造支部句会(大阪市)

西出一栄報

司会者が上手で弁士引きたたず 一 舟  
 入場券くばって舞を見てもらい 文 秋  
 米阪の父へダブ屋の高い券 六 童子  
 スラム街の興奮ドット石を投げ 半 月  
 ジグザグの挑発ポリも興奮し 章 雅  
 マッチする手へ興奮がまだ残り 市 郎  
 ユーモラスな野次興奮をやらせる 義 介  
 興奮の胸に卒業証書抱きしめる 志津子  
 オリビツクワンペンが欲しいガムを買い 宇佐夫  
 オリビツクワンペンに英語が間に合わず 静 馬  
 五輪ムード景気に縁のないムード 正 彦  
 オリビツクワンペンで汚職もふせておき 良

川 雑 ハワイ支部句会(ハワイ)

築山快夢起報

過去は過去にて余世のプラン立て 浅 太  
 過去ばかり追うて希望のない生活 紅 溪  
 過去などはどうあろうとも今の地位 万里涉  
 停年になって詮ない過去を追い 内 海  
 永すぎた春です二人は今ここに 峯 圓  
 御陰居も過去の話に飾りつけ 平八郎  
 過去は過去忘れ給えと慰める 暁 舟  
 過去そつと包んで娘世帯もち 雪 女  
 古疵はそのまま社長へのしり 三 石  
 老骨に過去の恋しい日が続き 快夢起  
 前科などなんでもないと惚れている 魔花麗  
 過去は過去忘れまじと手を握り 魔花麗  
 古疵の話をそらす爛をつけ 魔花麗  
 事々に過去にふれ合う倦怠期 河童風流  
 正直に話した過去が仇となり 美 舟  
 良心に問えば伏せたい過去がある 柳 葉  
 生仏様にも過去があったとか 柳 山

川 雑 出雲支部句会(出雲市)

尼緑之助報

実力の相違いやはや後手の後手 峯 圓  
 実力より野球選手で入社出来 万里涉  
 裸一貫さあ実力の見せどころ 暁 舟  
 実力に信頼資金貸してやり 柳 山  
 実力者汚職は法の網を抜け 柳 山  
 実力の過信思わぬ失敗し 紅 溪  
 如才ない笑顔で実力探り合い 美 舟  
 実力が欠伸している社員室 河童風流  
 権門に逆らい実力ほつとかれ 魔花麗  
 実力は兎も角運のいい男 浅 太  
 触れ込みがまず実力を疑わせ 平八郎  
 実力はないが如才のない処世 内 海  
 実力とねばりて今日の晴姿 あき坊

川 雑 大聖寺支部句会(加賀市)

野村味平報

働か貧乏男は船を洗いおり 司 郎  
 徳行の人足音もせぬほどに 紫 蘭  
 目に見えぬ徳行それは母であり 親 生  
 お隣りのごみ箱も出し知らぬ顔 龜 一

川 雑 備前支部句会(岡山県)

横山一声報

考えてくれと家計簿そつと出し 河 南  
 遠足の子が気がりな空模様 独 仙  
 考えをよくしておけと仲人さん 草 人  
 若き日の秘密を綴る日記帖 やすを  
 少年の秘密が続くナイトショー 李 朋  
 法律の裏をこそこそ考える 岬 月  
 もう一度考え直す頭下げ 緑之助

川 雑 京都支部句会(京都市)

田中烏雀報

よろめきの妙技を秘めた賢母ぶり 真 砂  
 蛾の様に聖火へ妙技競いに来 句 楽 坊  
 いるか追ふ魚火の妙技も命がけ 半 月  
 黄色蝶になりたい女の暇なとき 啞 雀  
 一筆い絵具で書いて秋は黄色の風景 白 史  
 あざやかに黄がや、残り不動尊 烏 雀  
 黄色い骸骨となりヤングルの孤独 枯 粒  
 大きくはならぬ男が揺ぐる土俵 紅 鳥  
 大きくはならぬ男が揺ぐる土俵 紅 鳥  
 ざぼれ萩除けて尼僧の竹箒 和 三 郎  
 掃除の水捨てて来てへちま見ている 豊 次

こくよ 便

片田舎の文化アンテナ立ち並び 羊栽  
文化の日菊も飾ってある役所

川維 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

まむし飯夫婦で食べて恙がなし 敏明  
調理師の腕にうなぎは細くなり 祥月  
一切のうなぎにこもった母の愛 功  
うなぎまた食わぬに盛夏通り過ぎ 勇  
忙しさは姑昼寝を起きてくる 李朗  
子の昼寝起こす隣の子が覗き 明朗  
丑の日へうなぎ大きく息をする 冬樹  
大臣の答えうなぎのように逃げ 政吉  
一人前に座席を取った子の昼寝 清泉  
昼寝みならず電話が起こしに來 孝華

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

燈籠をあかず眺めていて床し 芎月  
益燈籠未亡人として灯をともし 伊久野  
石燈籠ほめて茶室の客になり 浄美  
燈籠の灯へ名木のたたずまい 柳風子  
石燈籠二人の恋は見守られ 良江  
燈籠の文字土ぐもが菓を作り 宗義  
三代目の庭を守った石燈籠 拙望  
燈籠に灯をいれ益の黄昏れる 謙士  
燈籠を流して益よきようなら 計  
信仰に生燈籠に名を連らね 始ン坊  
若後家のとほす燈籠色めける 笈九郎  
苔のある石燈籠の値ぶみをし 卓久  
燈籠の灯もこのごろは電化され 早笛  
燈籠を流して冊らぬ人を恋い 一声  
へら一人形作りに夢があり 美技子  
人形が姉妹げんかで負傷をし 静子  
人形もシヨートパンツをはいていた 正洲  
人形にわたしの恋が知って欲し 久米雄  
名月は雲にかくれてよく走り 幸仙

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

文化への理解を役所の予算に見 弘道  
運動会マヒの子がいて楽しめず 同  
運動会こけても走った子へ拍手 同  
運動会赤勝て白勝てみんな勝て しげる  
賽銭にお釣が欲しい顔で入れ 羊  
お賽銭はずんで頼む縁結び 百  
満願の日の賽銭ははずんどき 六  
集金を持たせ賽銭箱をあけ 実  
孫の字へ芯の折れないボールペン 章  
出の悪いボールペンなど見たくなり 雅  
鍵っ子が日暮の門で爪を噛み 実  
子猫もう爪の威力を知っており 男  
爪染めた嫁村中に噂まき てる子  
爪の垢程の恩義に票が割れ 東  
爪の香が爪に滲んだ篤農家 頼  
土の香が爪に滲んだ篤農家 弘  
全快のよろこび爪の色にも出 羊  
婚約を解消された赤い爪 いさ 歳  
赤い爪一家支えて嫁きはぐれ わか子 道

世相どう変わるうが君と僕 夢  
更年期色香も失せた花に似る 古  
まだ幸がこないひとり寝の男女 柳  
翠

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

恋二つ三つお化粧も上手にし 勝喜  
生きる為の化粧も派手に未亡人 松月  
パトロンが変り化粧もまた変り 蟬蛇  
夜を移く母の化粧が気に入らず 一  
美しい顔を汚したアイシャード 斐山  
化粧やけた顔や三味がひげ 松  
面接へふと考へたつけボクロ 未  
漬物の味が変わった母の留守 遂  
顔色に出すまい女意識する 勝子  
お色気が出来て小さい嘘もつき 幸  
伯母欠けてから親類が一つ減り 吞  
悪友といわれる中のその一人 洋  
星の降る舟べりなれば恋もよし 寛  
世相どう変わるうが君と僕 夢  
更年期色香も失せた花に似る 古  
まだ幸がこないひとり寝の男女 柳  
翠

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

つま楊子短い浴衣も旅のもの 六  
重箱のすみをつま楊子でせせり 半  
つま楊子くわえて職場を見る身分 林  
あくるあきはぶつ／＼言われる妻楊子 松  
円熟の芸今更に老を知る 青  
円は金欲が渦巻くキャパレーの灯 米  
問題を一つ一つは飯を食い 紅  
問題の娘処女で嫁にゆき 吉  
試験問題知つてるところが出てくれず 一  
問題はあなた次第と女いい 重  
窓口に夜のデイトのサインもし 美  
窓こして誘いがかる日曜日花 代  
百年後の富田林市 (五句) 梢

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

とばつちりからぬ先に座をはずし 句  
とばつちりあやまる役をせらる 念  
歩行者でよかった踏切でかい事故 山  
歩行者の轢かれた話寒う聞き 和  
歩行者の轢かれた話寒う聞き 慶  
歩行者の轢かれた話寒う聞き 天  
歩行者をあざけるように抜く新車 八  
歩行者が後戻りして友と逢い 鳥  
エキストラ歩くだけでも教えられ 宏  
歩行者はいつか盗塁らしくなり 路  
富柳会句会 (富田林市) 郎

始玉で寝がえりも打つ孫であり 万利

あすなる句会 (大阪市)

松江梅里報

百年後の富田林市 (五句) 都  
百年後も矢張り富田林市を使い 都  
御先祖は首切りされた市職員 柳  
百年も生きるつもり富柳会 美  
月よりの使者親善の姉妹都市 房  
町会のレクレーションは月世界 柳  
あすなる句会 (大阪市) 太  
梅里ノ店 大萬  
料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇  
TEL (三三) 三九三五番  
TEL (三三) 〇一四七番  
TEL (三三) 七七八二番  
TEL (三三) 〇一四七番  
TEL (三三) 九一八四番

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

つま楊子短い浴衣も旅のもの 六  
重箱のすみをつま楊子でせせり 半  
つま楊子くわえて職場を見る身分 林  
あくるあきはぶつ／＼言われる妻楊子 松  
円熟の芸今更に老を知る 青  
円は金欲が渦巻くキャパレーの灯 米  
問題を一つ一つは飯を食い 紅  
問題の娘処女で嫁にゆき 吉  
試験問題知つてるところが出てくれず 一  
問題はあなた次第と女いい 重  
窓口に夜のデイトのサインもし 美  
窓こして誘いがかる日曜日花 代  
百年後の富田林市 (五句) 梢

城北明老会 (大阪市)

田中風柳報

寝返りの気配話題を変えてゆき 一  
集金に來ぬか／＼と月の末 弓  
泣く／＼があるかと許す氣に変わり 彦  
倦怠期我が太陽にソッポ向き 百  
寝返のたびに針もつ手を休め 福  
なにもかもやろうとするから無理あり 郎  
集金の勘はつぶれるなど思い 素  
寝がえりは起きてますよという構え 梅  
城北明老会 (大阪市) 里

宴会・出張パーティ・折詰弁当  
梅里ノ店 大萬  
料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇  
TEL (三三) 三九三五番  
TEL (三三) 〇一四七番  
TEL (三三) 七七八二番  
TEL (三三) 〇一四七番  
串の店 南区豊屋町三ツ寺セシヤ  
TEL (三三) 九一八四番

豊作と安心出來ず案山子立ち 濁水  
老父母を安心させるうそもませ 繁子  
安心をして人生は下り坂 一登  
安心をせよとの便り気にかかり 富士  
傘風呂にはいつてさみし一人者 清江  
パチンコの母ごも泣くもなんのそ 生  
敬老会孫に連れられ嬉しそう 久子  
鉢植をいためたは孫叱られず 喜久  
盆栽をずらりと前に月見酒 源川  
外交の腕が課長の椅子につき 芳柳  
吊皮にずらり並んだ腕時計 美代  
たのしい腕を見込んだ娘や 須美  
夏まけの細いかいなをそと撫で 須美  
来る秋に腕によりかけ菊作り 清光  
細腕でがん張りしました五十年 清子  
とうちゃんが笑顔で負ける腕相撲 弘村

# 柳樽室

路郎生



★秋の日ざしが机上に跳る。都塵の中にもさわやかさが感じられる。★こうした佳い季節に本誌は創刊四五〇号を迎えた。普通なら祝賀の記念号を華々しく出すところだが、今の私にはそうした月並なことは煩わしいだけだ。ひとりひそかに祝杯をあげれば、それですんでしまふ。清潔で簡単、それが今の私には一番ふさわしいのではないかと思う。昭和二十八年には私の句集「旅人」が出た。それを機会に、私の誕生日をみんなで祝ってやろうという、「川雑川柳まつり」が生まれた。もう十年も生きるか、どうか判らぬが、せめて十年ぐらいは生きたいという意図から、十年を目指して企画することになったがその「川雑川柳まつり」も昨年で予定通り終了にした。十年の歳月も流れるように早かった。そこへ本年は喜寿と金婚が重なった。これも昨年から大段的に祝賀の企画が、あったが、私の健康が、みなさんのご好意にお応えする状態でないことを思ひおこたわりしたのであった。

★本誌の発行中には日支事変があ

## 募る広告年賀交歓人柳

### 川柳雑誌社

- ★新年号へ  
あなたの年賀広告を  
一口金三百円。  
幾口でも申し込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は十二月七日着便。
- ★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

たいものだ感謝している次第だ。「川柳雑誌」が茅出度くゴールインするのは、いつの日か判らぬがその時こそ、柳人こそって祝っていたきたい。★日本柳界を

り、太平洋戦争があり、我が国の一大転換期の多事多難時代に遭遇したにもかかわらず雄々しく闘い抜いた「川柳雑誌」を高く評価され、支持し続けられたご好意は何物にもかえがたいものだ感謝している次第だ。「川柳雑誌」が茅出度くゴールインするのは、いつの日か判らぬがその時こそ、柳人こそって祝っていたきたい。★日本柳界を生き残っている人々にとつてはこれぐらいい淋しいことはないと思う。柳界の曲りかどに来たことを思わされると同時に次代の新人の飛躍を希うのは私だけではあるまい。★私は十月八日の夜、文蝶忌を修した翌九日の朝、伊丹空港から熊本へ飛んだ。足が不自由なのでステッキ一本を頼りの一人旅だった。改札口を出て飛行機のタラップにたどり着くにさえしんがりだった。「改札を出るも先駆者たらんとす」という腹乃の句を思い出して、苦笑せざるを得なかった。往年の私を詠んだものだが、今の私には感慨深いものがある。しかし、時間を縮めることで、歩かない旅を考えるだけでも、どこかに私らしいところが残っているように思った★昨年、熊本の本友田中辰二(鳴鳳)氏の臥床を知って、見舞に行くつもりが果さなかつたので、本年はどうでも行きたかと思つた。どんなにわるいのか、この眼でたしかめたかつたからである。一昨年、川上三太郎氏が入院した時にも、こちらで案じているより行つた方が早いと出かけたのだ。そんな時は一寸でも顔を見に行くことである。三太郎氏の時は三十分ほどで引きあげたが、田中邸では二時間ほどいた。鳴鳳氏の門下の黒田緑氏が記念に写真を撮るといので、庭先に出たが、鳴鳳氏はすぐ病床にもどつたので、私は氏には左様ならぬと云わずに引き上げた。柳界展望欄に載せた写真は緑氏が私のカメラへ撮つてくれたものだ。★田中夫人やお嬢さん、緑氏、ト占氏(川雑八代支部長)に熊本空港まで見送られ、午後の便

肩こり・神経痛  
筋肉痛・腰痛  
疲れ目・便秘に  
●アリナミン  
●高長性アリナミンF  
活性持続型ビタミン

**疲れ! アリナミン®**

で、大村空港へ飛んだ。ここには諫早の川岡靈眼子君と諫早川柳会の小野螢子、江副卓二、庄司万象、松本蘇範、佐藤万金の諸君等の出迎えをうけた。諫早市ではいろいろ歓迎のスケジュールを組まれてあつたが、少し疲れたのか、その夜から下痢気味となつたので、大事をとつて臥床した。翌十日、午後一時から私の枕許で二十名ほどの句会がはじまり、全部の選句と、三時間の柳話で責だけはふさいだがベットの上的の柳話はこれが初めだった。私も熱をあげて喋べれたからだと思う。枕許での宴会は八時まで続いた。長崎から池田可背氏が長崎市での歓迎打合せのために来られた。いろいろ準備されていたらしいので恐縮したが、あこがれの長崎も雲仙も断念して諫早の靈眼山房で臥床四泊、靈眼子ご夫妻にご迷惑をかけた。殊に美寿寿夫人には滞在

中身のまわりのお世話もかけた。お札の言葉もない。長崎はまたの機会に譲りたい。不惑。★今回の柳樽室は殆ど私事ばかりを書いて恐縮の外はないが、もうスペースがないのでご寛恕が願いたい。

★川雑支部十一月句会  
★かがみ句会2日(月)七時、題、疲勞・片付け・代金・落葉・足跡、所、池田古心居、★明和研究句会8日(日)一時、題、生む・玉・夜学、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★玉造句会10日(火)六時半、題、ひっかける・シーズン・哀愁、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★京都句会16日夕、題、頼杖・耐る・利息、所、四糸繩手仲源寺、★阿倍野句会20日(金)六時、題、世界・スポーツ・国旗・参加、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大方、★南海電鉄句会19日(木)六時、題、新幹線・からくり・下駄、所、難波高架下親和クラブ、

営業所  
阿倍野店  
堺吉店  
住野店  
平島店  
都生店  
蒲生店  
十三店  
九条店

credit system

**丸越**

コ

買いいい  
月賦百貨店  
良い安い

Tranquillus(静穏)とLaxare(筋弛緩)の両作用をもつ

# 筋弛緩剤 トランコパール

TRANQUILAXANT

(一般名) クロルメザノン (米国ウインスロップラボラトリーズ提携品)



第一製薬  
東京・日本橋

〔包装〕 (100mg) 100錠 500錠

薬価基準 1錠 (100mg) 15円40 一文献進呈一

## 大阪文化祭第16回川柳大会

恒例による大阪文化祭の川柳大会は左の通り第十六回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすすめてください。又どなたも出句の有無にかかわらずご来場の程お待ちいたします。(会費不要)

主催 大阪府、大阪府教委  
大阪市、大阪府教委

日時 昭和39年11月21日(土)

一時開場、二時開会

会場 大手前会館三階大広間

司会 西尾 榮

開会の辞

講演 初代 鳩治郎の話 西原 隆夫 大西利夫氏  
兼題 「食通」 麻生路郎 選

「淀屋橋」 岡橋宣介 選  
「嫉妬」 岸本水府 選  
「緑」 堀口塊人 選

席題二題当日発表

清興 鳩魔術

ゼンジー中村氏

閉会の辞

川柳 賞

帝・兼題優秀句に大阪府知事・府教育委員  
員長・大阪市長・市教育委員長から文化  
祭川柳賞を贈呈。

兼題投句

各題毎にはがき聖句箋及び官製ハガキ一  
枚に二句ずつ。裏面に住所・姓名・雅号  
を明記。大阪市北区中之島、大阪府教委内  
大阪文化祭川柳大会係宛(十一月十日着  
限りメ切)

入選作品集

希望者に頒布。一〇〇円(郵券可)

Printed in Japan

### 募 集

課題吟募集

大 胆 広津柳慶 選  
家 具 橋高薫 選  
拾 い 屋 辻白溪子 選  
(十一月十五日締切)

君 が 代 西尾 榮 選  
押 売 り 田垣方大 選  
見 送 り 辻 圭水 選  
(十一月十五日締切)

近作柳樽 麻生路郎 選  
人 生 譜 北川春 選  
川 柳 塔 河野春 選  
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎 選  
(十一月十五日締切)

投 稿 規 定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名  
▼ 雅号を明記する事。  
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。  
▼ 「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が  
出来る。  
▼ 「川柳塔」の投句は不刊会員に限る。

### 川柳雑誌 第三十九号

定価 一一〇円 (送料六円)

半力年 七五六円 共  
一力年一、四四〇円 共  
昭和三十九年十月廿五日印刷  
昭和三十九年十一月一日発行

### 川柳雑誌社

発行所 大阪府住吉区西五丁目二五番地  
電話 大阪(67)七六〇八一  
社務部 大阪(67)七六〇八一  
社務部 大阪(67)七六〇八一

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可  
昭和廿九年十一月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集 兼  
発行 川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目三番地 電話大阪6771

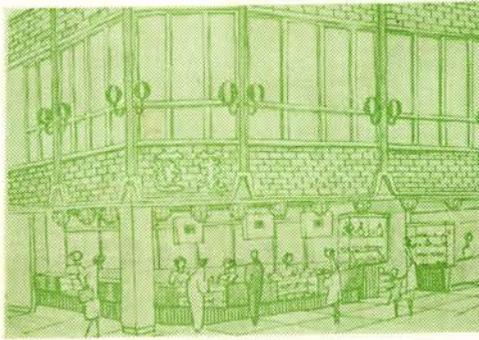
川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目三番地 電話大阪6771

電話大阪6771

定価百二十円

# 豚饅・焼売



広東料理

## 蓬萊

大阪なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアード

# 体力・気力を生む



スポーツも  
仕事も  
オルパで頑張ろう



疲れをとり  
抵抗力の強い  
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

## ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

秋のみさき

11月30日まで

# 魔法の祭典



★魔法の宮殿 ★21世紀グランド魔術ショー (ゼンジー中村と魔法のグループ)

第5回 みさき菊花展 10月20日~11月30日

入場料 大人 140円 小人 70円  
割引入場券つき往復乗車券 なんばから440円

<主催> **南海電車**  
大阪読売新聞社